

歴史資料でよむ久喜市ゆかりの人物ブックレット ③

内藤正成の活躍

Naito

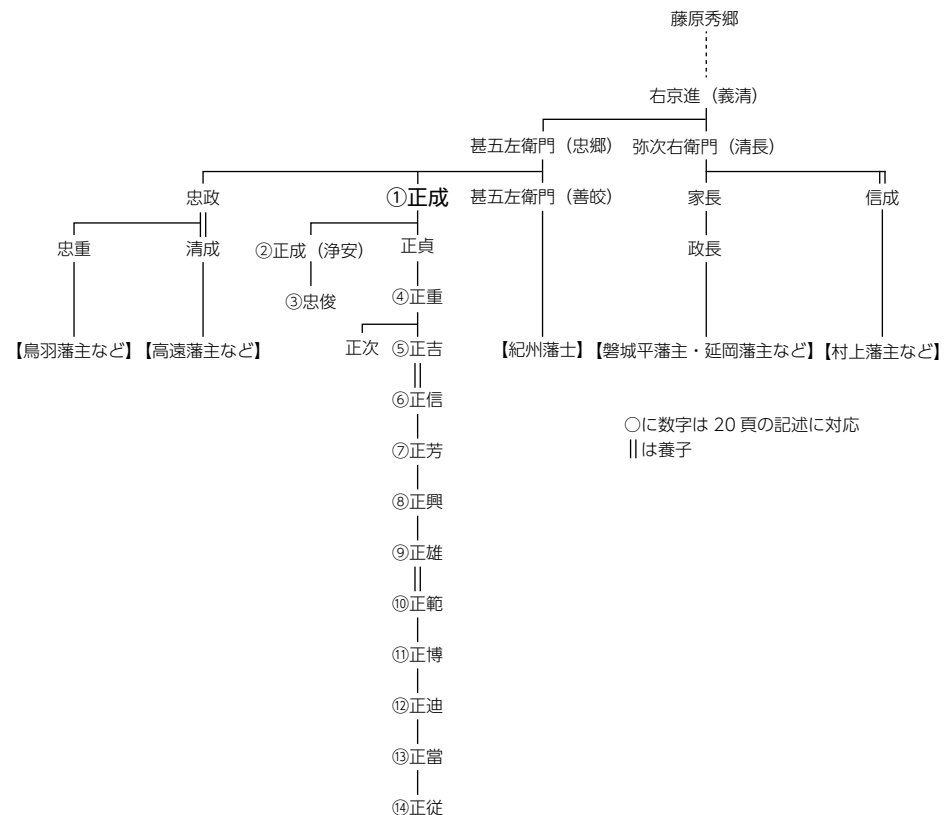
Masanari

監修 國學院大學教授 吉岡 孝
Yoshioka Takashi

❖ 目 次 ❖

1	寄稿「内藤正成の活躍」	
	第1章 内藤正成の家系	1
	第2章 内藤正成の活躍	5
	第3章 内藤家の地方支配	14
2	関係資料 解題	25
3	関係資料 (現代語訳)	
	一 『干城録』 卷第百十二	26
4	関係資料 (本文)	
	一 『干城録』 卷第百十二	40
	二 『寛永諸家系図伝』 藤原氏丙十冊之内三 秀郷流	52
	三 『寛政重修諸家譜』 卷第八百十一	55
5	主な参考文献	59

内藤氏略系図



○に数字は 20 頁の記述に対応
||は養子

凡例

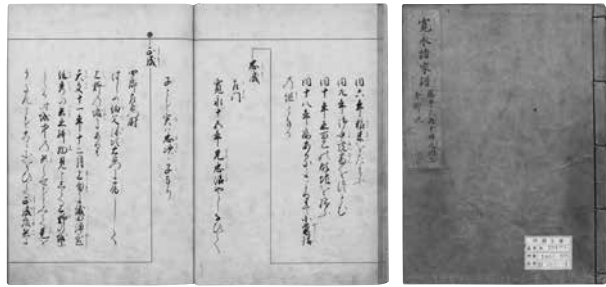
- 1 本書は、市ゆかりの人物に関する基本文献に相当する関係資料をまとめ、それらの関係資料を基礎にして、当該人物の叙述を試みたものです。
- 2 本書は、原則として三部構成になっています。
 - ① 当該人物の概要が理解できるように平易に叙述した専門家の寄稿文
 - ② 当該人物に関する関係資料を現代的な言葉で意識した現代語訳
 - ③ 当該人物に関する関係資料の本文
- 3 本書は、久喜市ゆかりの人物に関する一般的な読み物と、当該人物に関する基本文献に相当する関係資料を整理した資料集に相当するものです。
- 4 本書の刊行に当たり、次の方々にご協力をいただきました。ここに記してお礼申し上げます (敬称略)。

安城市教育委員会、犬山城白帝文庫、大熊真知子、岡崎市、岡崎市教育委員会、勝見知世、加藤正幸、久喜市立郷土資料館、国立公文書館、埼玉県立文書館、勝鬘寺、白石昌和、神明神社、誓願寺、善宗寺、善導寺、大乗寺、東京大学史料編纂所、豊國義信、豊田市郷土資料館、内藤眞、延岡市 内藤記念館、浜松市博物館、渡辺晃

表紙

「小牧長久手合戦図屏風」に描かれた「内藤四郎左衛門正成」(犬山城白帝文庫蔵・提供)

馬上の内藤正成を家来たちが取り囲んでいる。轍には、内藤家の家紋「下がり藤」が描かれている。全体写真は13頁参照。



『寛永諸家系図伝』
(国立公文書館蔵)
25頁の「関連資料解題」2参照。



『徳川十六将図』 (浜松市博物館蔵・提供)
右図は正成の拡大。

第1章 内藤正成の家系

内藤正成は、徳川家康を助けて徳川幕府を創業したという功績ある家臣で、弓の名手として知られ、家康配下の優秀な武将を集めた徳川十六神将の一人にも数えられています。彼は晩年、現在の久喜市の一部を領地として与えられました。当市とも関係が深い人物といえます。本書では、この正成の活躍を中心に紹介していきます。

この章では正成の家系について述べていきます。参考とする史料は『寛永諸家系図伝』(以下、『系図伝』という。)を基本にして、『寛政重修諸家譜』(以下、『諸家譜』という。)で補って論じていきます。『系図伝』は徳川幕府三代将軍徳川家光によって編修が命じられた書物で、編修の責任者には家康の相談役で、知識人でもあった儒者林羅山が選ばれ、寛永二十年(一六四三)に完成しました。大名や旗本家の系図千四百余りが掲載されています。『諸家譜』は江戸幕府の若

どしよりほったまさあつ年寄堀田正敦が編修の総裁者になり、文化九年(一八一二)に完成しました。二千百三十二家の大名・旗本の系図が収録されています。『系図伝』によれば、正成の先祖は藤原秀郷になっています。秀郷は、天慶三年(九四〇)に関東地方で反乱を起こした平将門を討った人物として有名です。この功で従四位下、下野守の位官に任じられています。後年、近江三上山のむかで退治をした伝説が創られたのも、彼が強く勇ましい人だったからでしょう。俵藤太の別名も有名です。

ところで、『系図伝』によれば、内藤氏の系図は秀郷七代の子孫行俊から中断しています。秀郷が先祖というのは恐らく本当ではなく、実際の正成の先祖は祖父に当たる右京進からしかわからないと考えた方がいいでしょう。右京進は通称で、諱(実名)は義清といったと『諸家譜』にはあります。ここでは右京進ということにします。

右京進は、祖父の代から松平信忠に仕えたとあります。安城城(愛知県安城市)を拠点にした信忠は延徳二年(一四九〇)に生まれ、文



安城城跡(安祥城址)
(愛知県安城市 大乗寺・安城市教育委員会提供)



『寛政重修諸家譜』
(国立公文書館蔵)
25頁の「関連資料解題」3参照。

龜三年(一五〇三)頃に家督を相続し、大永三年(一五二三)に隱居し、享祿四年(一五三一)に死去しました(平野明夫『三河松平一族』)。徳川家康の曾祖父に当たります。

また、右京進は三河上野城(愛知県豊田市)を任されたといひます。右京進の跡継ぎで通称弥次右衛門(実名は『諸家譜』によれば清長)も上野城主だったと『系図伝』にはあります。この弥次右衛門は、正成の伯父に当たります。また関ヶ原の戦いに先立って行われた伏見城の攻防戦で、鳥居元忠とともに籠城し、壮絶な戦死を遂げた内藤家長は弥次右衛門の子息に当たります。家長の直系は陸奥磐城平藩(福島県)七万石の藩主になり、やがて日向延岡藩(宮崎県)七万石に移り、ここで明治維新を迎えます。なお正成の弟忠政の嫡男忠重の家系は三万五千石の志摩鳥羽藩(三重県)主を生み出した家系で、忠政の養子清成の家系は三万三千石の信濃高遠藩(長野県)主になっています。また正成の伯母の息子内藤信成の家系は越後村上藩(新潟県)五万石を与えられます。内藤氏は武をもって徳川氏の天下統一を支

えた一族であり、多くの大名を生み出した家系といえるでしょう。

松平II徳川氏が安城城(愛知県安城市)を拠点にしていた時から仕えていた家臣の家系は、安城譜代といって、譜代の家臣のなかでもひとときわその由緒を誇りましたが、『系図伝』をみる限りでは、内藤氏も信忠の代から仕えているので、その一つということがいえるでしょう。ただし、これについては異説も存在します。内藤氏は元々上野城に居住していて、家康の祖父で岡崎城を拠点とした清康以降に仕えたというものです(菊地浩之『徳川家臣団の謎』)。この説では、内藤氏は安城譜代ではなく岡崎譜代ということになり、信忠から仕えているという由緒は仮託ということになります。本書では、内藤氏を岡崎譜代と考えておきます。

正成の父は甚五左衛門といい、弥次右衛門の弟に当たります。松平信忠の孫、広忠に仕えました。広忠は大永六年(一五二六)に生まれ、天文十八年(一五四九)に家来に斬殺されました。家康の父としても知られています。甚五左衛門は広忠に仕えて十六度も軍功を挙



岡崎城 (愛知県岡崎市・岡崎市提供)



伝・内藤清長の墓
(愛知県安城市 誓願寺・安城市教育委員会提供)

げたといひます。天正三年(一五七五)、織田・徳川連合軍と武田勝頼軍が激突した長篠の合戦では、家康の長男である岡崎三郎信康に属して、その戦いの様子を家康に伝えました。甚五左衛門は、天正八年(一五八〇)七月に七十歳で死去しました。

甚五左衛門の長男はやはり甚五左衛門といい、法名が善皎であったということ以外、詳細はわかりません。この善皎の長男の家系は、家康の十男の頼宣に仕えます。頼宣は後に紀州藩主になるので、彼の家系は紀州藩に残っています。

本書の主人公正成は、甚五左衛門の次男、善皎の弟に当たります。彼については章を改めて詳しく紹介しましょう。

第2章 内藤正成の活躍

内藤正成、通称四郎左衛門の生まれた年については『系図伝』には記載されていませんが、死亡した年と年齢がわかっているので、

逆算すると大永七年(一五二七)のことになります。この頃松平氏は家康の祖父清康の代であり、岡崎城(愛知県岡崎市)に拠って三河の統一をしようとしている時期でした。

その清康は、天文四年(一五三五)十二月、尾張守山(愛知県名古屋(市)へ出陣中に家臣の阿部弥七郎によって殺されてしまいました。この事件を守山崩れといひます。この守山崩れによって、清康の跡継ぎである広忠は、松平信定によって岡崎城を追放されてしまいました。信定は、隣国尾張の織田信秀(信長の父)と通じていたといひられています。この広忠が駿河の今川義元の援助をうけ、岡崎城に復帰したのは天文六年(一五三七)六月のことです。内藤正成はこの広忠に仕えました。この章では正成の活躍を四つの時期に区切ることで、正成がどんな活躍をした人物なのか、確認していきましょう。

第一期は初陣から桶狭間の戦いまでです。広忠が復帰するためには今川氏の力を借りる必要があったため、広忠は今川氏に従わなければならず、彼らのために織田氏と戦う、というのが基本的な構図



しょうまんじ
勝鬘寺

(愛知県岡崎市針崎町・岡崎市教育委員会提供)
一向一揆の際に、一揆勢の拠点になった寺院。『系図伝』などには、野寺(現愛知県安城市野寺町)から針崎へ移った一揆勢が正成と戦ったことがみえる。



「徳川家康像」(個人蔵)

です。正成の初陣も天文十一年(一五四二)十二月、十六歳の時、上野城に物見に来た信秀の兵と槍を合わせるといふものでした。前章で述べたように、内藤氏は上野城を任されていました。正成は、本家筋にあたる伯父弥次右衛門に属してこの上野城を守っていたのでしよう。この織田氏との戦いにおいて、正成はしばしば武功を挙げています。初陣から数日後の上野城籠城戦では見事な弓の腕前を披露し、広忠に初めて召し出され、三河国羽角村(愛知県西尾市)で領地を与えられ、伯父弥次右衛門からは刀を与えられています。

この時期の松平氏は、天文十八年(一五四九)に広忠が死去、嫡子竹千代(後の家康)を今川氏に人質として差し出していました。そのため今川氏に強圧的に押さえられ、合戦においても松平家臣団は最前線に配置され、犠牲が多かったといわれます。そんな状況が一変したのが、永禄三年(一五六〇)五月に起こった桶狭間の戦いです。この戦いによって今川義元は戦死、織田信長が勝利しました。信長は、父信秀の死によってこの時には当主になっていました。従

来この戦争の勝因は信長による奇襲攻撃とされてきましたが、現在では否定されています。信長は正面突破作戦で勝利を得ました(藤本正行『信長の戦争』)。

この合戦の結果、竹千代改め元康は、人質から解放されて岡崎城に復帰、織田と同盟を結び、三河国統一を目指します。この時期が正成の活躍の第二期とっていいでしょう。

この第二期を代表するのが三河一向一揆との戦いでした。三河国は、親鸞が開いた浄土真宗(一向宗)が盛んなところでした。戦国時代の浄土真宗の信徒は、武士の支配を嫌ってしばしば一揆を起したことが知られています。三河でも例外ではなく、永禄六年(一五六三)に、元康の根拠地である岡崎を含む西三河で一向一揆が起ります。元康はこの年に家康と改名していますので、以後は家康という名前を使います。

松平氏の家臣団のなかにも当然一向宗の信徒がいますし、一族同士で戦う悲惨な戦いになります。正成も家康を討ち取ろうとした自



「内藤家長・馨崇院画像」

(延岡市 内藤記念館蔵・提供)

内藤家長(右)とその夫人の馨崇院(左)。

分の伯父石川十郎左衛門の膝を矢で打ち抜き、このため石川は命を落しました。家康はこのことに深く感動したといえます。家康はなんとか一向一揆を乗り切り、永禄九年(一五六六)頃に三河国統一を終えました。同じ年に松平氏から徳川氏に改称し、朝廷から三河守に任じられました。このころ徳川家は軍制を定めています(笠谷和比古『徳川家康』)。正成は服部半蔵等十四名とともに「足軽指引物見役の衆」になっています。足軽大将として弓などを使用する足軽を指揮し、偵察としての役割も担った役職です。正成も徳川軍団の武将として重要な一角を占めたといえるでしょう。この軍制では、東の「惣先手侍大将」として酒井忠次、西の「惣先手侍大将」として石川数正が挙げられますが、内藤家の本家筋にあたる家長は石川数正に属しています。

家康は永禄十三年(一五七〇)二月に信長に従って上洛し、以後本格的に信長の天下統一戦に参加することになります。正成ももちろんこれに従います。これを第三期ということにします。

榊原康政の墓
(群馬県館林市 善導寺)



越前(福井県)の大名朝倉義景は、織田信長が奉じた將軍足利義昭の入京命令を拒否します。そのため信長は、朝倉氏を征討しに行くのですが、味方だった近江(滋賀県)の大名浅井長政が義兄信長を裏切り、事態は複雑化します。元龜元年(一五七〇)六月、浅井・朝倉連合軍と織田・徳川連合軍が、現在の滋賀県長浜市野村町附近の姉川で激突します。家康は信長に一番手を主張し認められます。

この戦いは信長の勝利で終わりますが、勝因は徳川家の武将榊原康政が敵の側面を突いたことにあるとされていますので、徳川軍は奮戦したといっているでしょう。正成も槍や弓で戦っています。ただし浅井・朝倉氏の滅亡は天正元年(一五七三)八月頃ですから、この合戦から三年以上も後のことです。姉川の戦いによって浅井・朝倉連合軍が壊滅的な打撃を受けたわけではありません。

元龜三年(一五七二)十二月、甲斐(山梨県)の大名武田信玄を現在の静岡県浜松市で徳川軍が迎え撃った三方ヶ原の戦いにも、正成は出陣しています。この時期、徳川氏は拠点を岡崎城から浜松城

【長篠合戦図屏風】（犬山城白帝文庫蔵・提供）

△の交点が正成のいる場所。右図は信康周辺の拡大図。
中央やや左が信康、右上が正成。



【元龜三年十二月味方ヶ原戦争之図】

（浜松市博物館蔵・提供）
三方ヶ原の戦いを描いた明治時代の錦絵。

に移していました。浜松城を打って出た徳川軍は、大敗北を喫してしまします。この時、家康は不利な戦局にもかかわらず突撃しようとしませんが、夏目吉信が身代わりになって家康を逃がしました。正成も家康に退却するように諫めたといえます。正成は撤退し遅れた子息正貞を助けて、敵から奪った馬に正貞を乗せて退きました。敵の首も取っています。テレビ時代劇には出てきませんが、敵の首を切って武功を認めてもらうことこそ、武士にとって合戦にでる大きな目的です。戦では負けてしまいましたが、正成は武功を挙げ、家康を支えました。

信玄は、元龜四年（一五七三）四月、信濃国（長野県）で病没します。その跡を継いだ武田勝頼と織田・徳川連合軍は、天正三年（一五七五）五月に長篠（愛知県新城市）で戦闘に及びます。織田・徳川連合軍による三千挺の鉄砲による三段撃ちは今日では否定されていますが、鉄砲を有効に使って勝利したことは事実と聞いていいでしょう（藤本正行『信長の戦争』）。この戦いにも正成は加わり、首を挙げ、

家康を喜ばせました。

「長篠合戦図屏風」（犬山城白帝文庫）をみると、正成は家康の長男、この合戦の四年後に信長の厳命で切腹させられた信康の側近く、紅白の陣羽織を着し、馬に乗った姿で描かれています。また正成の伯母の息子内藤信成は、最前線の馬防柵の外で鉄砲隊を指揮して武田軍と対峙しています。内藤一族はそれぞれの場所で奮戦したのでしよう。

長篠の合戦に勝利した織田信長は、天正十年（一五八二）六月、本能寺の変で急死します。徳川氏は、これ以後信長の後継者豊臣秀吉と対峙することになります。秀吉と戦った、あるいは秀吉とともに戦った時期を第四期としましょう。

天正十二年（一五八四）三月から十一月まで行われた小牧・長久手の戦いは、豊臣軍と徳川軍が正面から戦った合戦です。正成は偵察に出かけ、速やかに出撃することを進言します。味方はまた準備が整わないので出撃をためらっていると、正成は重ねて進言、これ



善宗寺と正成の墓
(久喜市葛蒲町下栢間)

浄土宗寺院。國豊山天龍院。開基は正成。寺号と院号は正成の法名から付けられている。朱印寺領50石。

善宗寺には内藤家の墓所があり、そのなかに正成の墓もある。20頁の写真参照。

「小牧長久手合戦図屏風」(犬山城白帝文庫蔵・提供)

右図は家康の本陣近くにいる正成の拡大図。表紙参照。

を家康は採用し、勝利を得たとあります。正成の経験の豊富さを表す逸話の一つです。

戦国時代に終わりを告げる天正十八年(一五九〇)の小田原の陣にも正成は出陣しました。しかし老齢のためか、目立った武功は挙げていません。ただ秀吉が正成の武名を慕い、正成との対面を希望したとの逸話が残されています。結局正成が辞退したため、対面は実現しませんでした。

慶長五年(一六〇〇)九月に起こった天下分け目の関ヶ原の戦いには、正成は参加していません。後の二代将軍秀忠に付いていた謀臣本多正信は、出陣の直前に正成を呼び、「老功」を理由に暗に出陣を要請しましたが、正成は徳川の勝利を確信していたため、その話を断っています(『千城録』)。勝利を確信している為に出陣しないとは、百戦錬磨の武人らしい話です。正成はそれから二年後の慶長七年(一六〇二)四月、領地である栢間村(久喜市)で病死しました。享年七十六。秀忠は正成のために医師を派遣し、治療に当

たらせました。どれほど正成を頼りにしていたかがわかります。

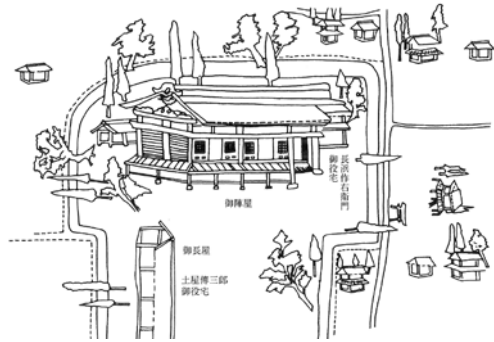
正成はまだ今川家に従属していた徳川家のために武力を振るい、徳川家の三河国統一に協力し、織田信長との同盟のために奮戦し、豊臣秀吉とも戦いました。彼のような家臣の活躍で徳川家が天下を取れたのは明らかでしょう。

正成は弓の腕前が優れ、さらに槍や偵察能力にもみるべきものがありました。しかし、やがて「徳川の平和」といわれる泰平の時代がやってきます。武功が必要とされた時代は過ぎ去ったのです。

次章では、領主としての内藤家に注目してみましょう。

第3章 内藤家の地方支配

徳川家康は、天正十八年(一五九〇)に豊臣秀吉に命じられて、東海地方から関東地方に移ってきました。その日は、公式には八月一日とされました。この日は「八朔」と呼ばれる吉日ですから、家



栢間村の陣屋
〔菖蒲町の歴史と文化財〕通史編より転載

さは横一町に豎三町程度です。四方に垣を廻らしています。内藤正成がこの地に住んで、後に旗本が江戸に集住することになったため、ここは留守番の家臣一人のほか、江戸の家臣が一人ずつ交代できて守らせました。現在もそうです」(意識)。

この記述から、陣屋は横一町(約百九メートル)、豎三町(約三百二十七メートル)であったことがわかります。『菖蒲町の歴史と文化財』通史編に拠れば、江戸時代後期に比定される村絵図には、陣屋に長浜作右衛門の役宅と土屋伝三郎の役宅が確認できます。彼らは内藤家の家臣でしょう。明治時代には、陣屋の面積は約三万五千平方メートル、垣ではなく幅十〜十五メートルの堀が廻らされていました。これをみると陣屋は明治まで機能していたことになりました。

江戸時代中期になると旗本は江戸の屋敷に住むことが普通になります。関東入国直後ではそもそも江戸の屋敷が整備されていませんでした。『徳川実紀』によれば、寛永二年(一六二五)三月に、旗本に対してその禄高に応じた屋敷地の面積が定められました。内



神明神社
(久喜市菖蒲町上栢間)
内藤家の菖蒲領の総鎮守と伝わる神社。約550mにも及ぶ参道がある。社叢は県指定天然記念物。

康もそのことを意識して公式の入国日にしたのでしよう。

家康の拠点は、当然江戸城です。家臣団の配置は、万石未満の旗本を一夜泊まって帰れる範囲に置きました。だいたい十里(約四十キロメートル)以内というところでしょうか。その外部に、万石以上の大名を置きました。この当時は、まだ東北の大名達の服属が疑問視されていた時ですから、北方への進撃を意図して、江戸城の北方に有力な大名を配置しました。上野国箕輪(群馬県高崎市)で十二万石を与えられた井伊直政、下総国結城(茨城県結城市)で十万一千石を与えられた結城秀康、上総国大多喜(千葉県大多喜町)で十万石が与えられた本多忠勝がその代表です。

内藤正成は、この時現在の久喜市菖蒲地区で五千石の地を知行所(旗本の領地のこと)として与えられました。その支配の拠点は、栢間村に置かれた陣屋でしょう。江戸幕府が天保元年(一八三〇)に編纂した『新編武蔵風土記稿』という書物によれば、栢間村の陣屋は以下のように記されています。「陣屋は村の西にあります。広



伝・栢間陣屋の門

(久喜市菖蒲町新堀 菖蒲城址あやめ園)

栢間陣屋の裏門とされている門。明治時代の陣屋廃止後、栢間村の名主を務めていた家に移築されたと伝えられている。平成10年に菖蒲城址あやめ園へ移築された。



栢間村の陣屋跡

(久喜市菖蒲町下栢間 栢間小学校)

陣屋跡の一部は現在、栢間小学校の敷地になっている。

同名の次男正成です。彼について『系図伝』には通称右京進、生まれは三河(愛知県)、法名浄安とありますので、ここでは浄安ということにします。家康と秀忠に仕えたとして記されていません。『諸家譜』には父親の「遺跡」(領地)を継いだとあるので、久喜市の領地も浄安に継がれたと考えていいでしょう。その浄安の跡を継いだとされている忠俊については、『系図伝』には記載がありません。忠俊、通称図書助は、書院番という役職にも就いたのですが、寛永八年(一六三一)に「不正」があつて絶家させられています。「不正」の内容については記録がありません。

では、久喜市の領地はどうなったのでしょうか。これについては、正成の長男、浄安の兄正貞、通称甚一郎についてみてみる必要があります。彼は家康の小姓を勤めたといえます。先述の姉川の戦いにも参加しています。正貞は当時二十歳、戦いの最中、槍を敵陣に落としてしまいましたが、引き返して槍を取り返しました。大変勇気のある人物だったわけです。戦国武者なら褒められそうな気がします。

藤家のような五千石の旗本は、五十間×四十間の屋敷地を与えられることになっています。また寛永十一年(一六三四)八月には、譜代大名で妻子を自分の支配地に置いていた者は、今年から江戸に引き移すことが命じられました。この時、旗本の家族も江戸に引き移ることになったようです(北島正元『江戸幕府の権力構造』)。しかし、栢間村の場合のように、旗本の陣屋支配がまったく消滅したわけではありません。

江戸時代は兵農分離の時代といわれます。領主である武士は、江戸のような都市に集住して農村から退去したというのが江戸時代の特質とされています。これについては近年疑問が出されていますが、少なくとも武士が全く村に居住していなかったというのは間違いです。栢間村の旗本陣屋のように、江戸時代が終わるまで存続し、江戸から家臣が派遣された事例はほかにも確認されます。地元の百姓が家臣として取り立てられ、苗字帯刀を与えられる場合もあります。

現在の久喜市に与えられた正成の領地を引き継いだのは、正成と



市指定史跡・旗本内藤家歴代の墓所(宝篋印塔ほか)

(久喜市菖蒲町下栢間 善宗寺)

正成(14頁)や正貞、正重(19頁)をはじめ、幕末までの内藤家歴代の当主とその妻などの墓標(宝篋印塔)が22基並ぶ。右端が正成の墓。配置図は60頁参照。



正貞(右)と正重(左)の墓

(久喜市菖蒲町下栢間 善宗寺)

20頁の写真参照。

が、家康は「命を顧みず、死を軽んじる者は功績を挙げることはできない」と言って正貞に謹慎を命じました。ここから、家康の慎重な性格がわかります。もつともこの謹慎は五、六日ですんだようです。

正貞は三方ヶ原の戦いにも参加し、手柄を挙げたのですが、天正元年(一五七三)に浜松において、村越左吉という人物と原因は不明ながらいさかいを起こして追放されています。その後駿府などにいたようですが、やがて家康に許され、現在の久喜市の一部である栢間村に居住します。寛永十一年(一六三四)五月、八十二歳で死去しました。

正貞の跡を継いだ正重は、父が追放にあったために祖父正成によって育てられたようです。天正十八年(一五九〇)正月に駿府で家康に会い、小田原北条氏を追討する小田原の陣には、家康の息子秀忠に従って出陣し、関ヶ原の戦いでは使番という役職を勤めています。その後、徒頭から持弓頭に移り、大坂の陣にも参加しています。

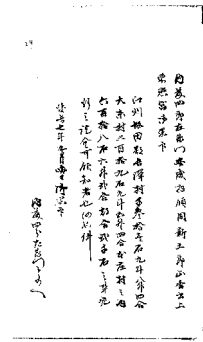
寛永八年(一六三一)に正重は栢間村を含む武蔵国埼玉郡(現在の久喜市を含む埼玉県の一部)で五千石の領地を与えられました。旗本としては禄高が高いといっているでしょう。これは、前述した忠俊の絶家によって、空いた領地をもらったものです。『系図伝』には正重は真面目に仕事に励んでおり、ただでさえ領地を増すべきところであり、まして「祖父が旧領」、正成が以前持っていた領地なので正重に与えたとあります。正重は寛文三年(一六六三)四月、八十六歳で死去し、栢間村の善宗寺に葬られました。

内藤家の当主の実名を初代正成から記すと、①正成―②正成―③忠俊―④正重―⑤正吉―⑥正信―⑦正芳―⑧正興―⑨正雄―⑩正範―⑪正博―⑫正迪―⑬正當―⑭正従と続き、明治維新を迎えます(『久喜市文化財調査報告書』第1集)。説明のために番号をつけました。

次に、内藤家の知行地の変遷をみてみましょう。①が五千石の知行を与えられたことは記述しましたが、②の代の慶長



【栢間里内藤氏系図】
 (大熊(正)家文書No.3814・
 個人蔵・埼玉県立文書館寄託)
 内藤家の知行地であった新堀村の名
 主家に伝わる、①正成から⑭正従まで
 の内藤家の系図。



【徳川家康知行宛行状写】
 (書上古文書・[東京大学史料編纂所蔵謄写本])
 ②正成が近江国に2000石の知行地を与えられた際の、
 家康からの知行宛行状の写し。

七年(一六〇二)に近江国坂田郡(滋賀県)において二千石の知行地を与えられ、全部で七千石になりました。③の代に近江国の知行地二千石を弟織部正に分与してまた五千石に戻りました。この十七世紀前期は旗本が盛んに分家を出して一族を増やしていた時期で、他の旗本でも分家創出は確認できます。④の代に既述したように、改めて久喜市の知行地を与えられました。禄高は変わらず五千石です。⑤の代の天和二年(一六八二)に、上野国山田郡台之郷村(群馬県太田市)・下野国安蘇郡作原村(栃木県佐野市)で七百石を与えられました。これは正吉が当時勤めていた旗奉行の役料を知行地として与えられたものです。これは当時の幕府の方針で、多くの旗本が役職に対する手当を知行地に改められています。それはともかく、以後内藤家は五千七百石の旗本として明治維新を迎えることになります。旗本の場合三千石以上は大身として特別扱いされますので、内藤家は非常に上級な旗本とっていいでしょう。

次に内藤家の格式と役職についてみてみましょう。旗本の格式は「諸大夫」・「布衣」・「それ以下」の三つに分けられます。そしてこの格式と役職が対応します。たとえば勘定奉行になると「諸大夫」の格式が与えられ、翌年朝廷に申請され、従五位下という位を与えられます。勘定奉行より格下の勘定吟味役になると、「布衣」という格式を許されます。これは朝廷の官位とは連動しません。勘定吟味役より格下の勘定組頭になるには、特に格式は必要とはされません。「それ以下」というわけです。

では内藤家ではどうでしょうか。この家系の特徴は定火消役に就任する者が多いことが挙げられます。定火消役とは明暦の大火(一六五七)の翌年に組織された江戸の消防組織の一つで、「布衣」の役職です。⑤は方治元年(一六五八)、つまり定火消役の創設とともにこの役職に就任しています。それから⑥⑦⑩⑫⑬が定火消役になっています。なお、⑧は二十七歳、⑨は二十三歳と早くに亡くなっています。彼らがこの役についていないのはこのためでしょう。



市指定文化財・善宗寺嘉永三年銘宝篋印塔及び宝塔記碑

(久喜市菖蒲町下栢間 善宗寺)

菖蒲領5か村の人々が中心となり、内藤家の武運長久などを願って嘉永3年(1850)に建立した宝篋印塔(右)と、その来歴を記した碑(左)。



正範建立の供養塔

(久喜市菖蒲町下栢間 善宗寺)

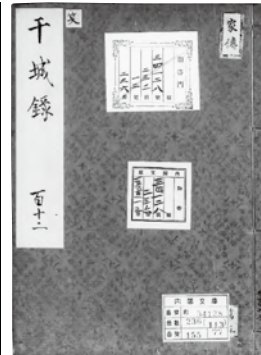
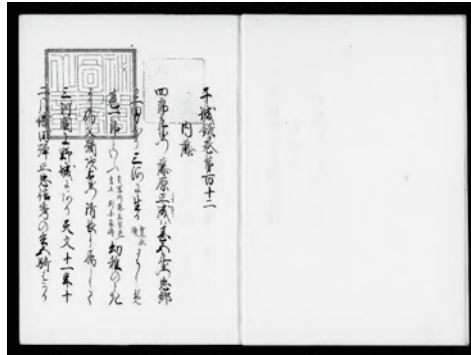
寛政11年(1799)に⑩正範によって立てられた無縁者などを供養する塔。

内藤家は定火消役と縁が深い家とあっていいでしょう。

④⑩⑪⑬は「諸大夫」もしくは従五位下になっています。この二つは同じ格とあっていいでしょう。④は「諸大夫」格の役職は勤めていませんが、寛永三年(一六二六)に従五位下になっています。⑩は定火消役になった後、天明六年(一七八六)に「諸大夫」の役職である小姓組番頭になり、同年従五位下安芸守になっています。⑩は最終的には駿府城代になっています。この役職は役高二千石、与力十騎、同心五十人で駿府城を守衛する重職です。⑪は寄合肝煎↓小普請組支配↓浦賀奉行と歴任しています。いずれも「布衣」の役職です。文政三年(一八二〇)に従五位下伊豆守に任命されましたが、その二年後に四十七歳で死去し、結局「諸大夫」の役職に就任することはありませんでした。⑬は安政六年(一八五九)に「諸大夫」の職である小姓組番頭になり、従五位下肥後守になっています。内藤家は高禄の旗本らしく、しばしば「諸大夫」の格式もしくは従五位下が与えられる名家とあっていいでしょう。

最後に、内藤家の知行地になった村落について述べておきましょう。内藤家の知行地は、現在の久喜市の一部である戸ヶ崎・新堀・小林・栢間・三箇の五か村です。既述したように、天和二年(一六八二)台之郷・作原村が加わります。そして、恐らく享保期頃駒崎村(蓮田市)と青毛村(久喜市)に二十二石余のわずかな土地を与えられました。ただ中心は戸ヶ崎等五か村にあったことは間違いありません。

文政六年(一八二三)といますから、もう江戸時代も後期のことです。この年は水害があり年貢があまり取れず、内藤家は、戸ヶ崎以下五か村の名主や商人に御用金を払わせました。彼らが千両前後の大金を持って江戸の屋敷に行くと、時の当主内藤正迪が大広間で飲食を振る舞ってくれ、御礼もいってくれました。また桜の歌を扇子に書いて下げ渡してくれました(『菖蒲町の歴史と文化財』通史編)。かつて武をもって徳川家の天下統一を支えた勇将の子孫も、江戸時代の領主として領民に支えられなければ生きていけなかったことがわかります。これが平和な江戸時代の実像といえます。



(国立公文書館蔵)

一 『千城録』 巻第百十二

内藤四郎左衛門正成は、忠郷の次男です。三河国に生まれ、はじめは甚一郎といました。子供の時から伯父の清長に従い三河国上野城で育ちました。

天文十一年（一五四二）十二月、織田信秀の兵五騎ほどが斥候として城の近くまで来たので、これを討ち取ろうと城中の兵が外に出ました。正成はその年十六歳になったばかりでしたが、ほかの兵に先んじて槍を交えて、手柄をたてました。

この月、尾張国の武士の新兵衛という者が、兵を率いて夜中に突然上野城を襲い、二の丸まで攻め込んできました。この時正成は弓を取り、百本の矢が入る土俵鞭（どひょうつばね）をつけて、走り出てこれを射ました。敵は尻込みして逃げていきました。正成は勝ちに乗じてたくさん矢を射ましたので、矢がもう少しで尽きようとしたとき、すぐ側に見慣れない子供が一人いることに気がきます。正成はこの子供に「矢を取って来てくれ」と言うと、子供は走ってすべての矢を拾って帰ってきました。そうしてまた矢を射ると、遂に勝利を得て、敵の死傷者は二百人も及びました。これは正成の弓の強さを証明するもので

1 『千城録』

文政10年（1827）から天保6年（1835）にかけて、江戸幕府が編修した旗本の伝記集。『寛政重修諸家譜』では旗本についての記述内容が充分ではなかったため、同書の総裁堀田正敦が中心となって、改めて詳細な記述内容となるものを編修した。近世初期から、3代將軍家光の亡くなった慶安4年（1651）までを対象期間にして、2,700名余りの旗本を取り上げる。書名は、旗本が人の鑑となり、国の干とも城ともなるようにと名付けられたもの。全235巻。国立公文書館蔵。正成については、「巻第112」に掲載されている。『千城録』（人間舎）第7所収のものを活用。

2 『寛永諸家系図伝』

寛永18年（1641）から同20年（1643）にかけて、太田資宗を総裁、儒者林羅山を責任者として、江戸幕府が編修した大名や旗本家などの系譜の書。1,400余りの家を取り上げる。仮名本と真名本があり、それぞれ全186冊。仮名本は国立公文書館蔵、真名本は日光東照宮蔵。正成については、「藤原氏丙十冊之内三 秀郷流」に掲載されている。仮名本を翻刻した『寛永諸家系図伝』（続群書類従完成会）第8所収のものを活用。1の『千城録』では「寛永譜」として引用されている。

3 『寛政重修諸家譜』

寛政3年（1791）から文化9年（1812）にかけて、若年寄堀田正敦を総裁として、江戸幕府が編修した大名や旗本家などの系譜の書。2,132の家を取り上げる。全1,530冊。国立公文書館蔵。各家から提出された系図などをもとに短期間で編修された『寛永諸家系図伝』は間違いが少なかったことから、『寛政重修諸家譜』では各家資料の比較や新資料の採用など、『寛永諸家系図伝』の間違いを訂正して改訂した。正成については、「巻第811」に掲載されている。『新訂 寛政重修諸家譜』（続群書類従完成会）第13所収のものを活用。1の『千城録』では「家譜」として引用されている。

※紙面の都合上、現代語訳については資料1のみとした。また、資料1に引用されている史料名については、現代語訳では「ある史料」などとした。

※資料1の本文括弧書きの文章のうち、関係のある部分のみ現代語訳した。

※資料の本文については、原則として各解題に記した刊本を転載したが、原本を参照するなどして一部変更した部分がある。

す。松平広忠様はこの戦功に感心して、三河国幡豆郡内に褒美として領地を与えました。清長もこの功をほめて七所拵えの刀を与え、松平某も家に伝わる目貫・筈を授けました。

この年、三河国安城城の兵が上野城を襲った時、敵将が先陣まで進み兵士に指示して攻め寄せてきたので、味方の武士も打って出て戦いました。正成はほかの兵に先んじて五十メートルほど進んだところで、この敵将と槍を交え、とうとう突き倒して首を取りました。こうして敵は勝ち目を失って敗走しました。清長はこの働きに感心して鎧と脇差を与えました。

弘治三年（一五五七）、刈屋合戦の時も槍で敵を突き倒して首を取りました。また弓を取って多くの敵兵も倒しました。

永祿元年（一五五八）二月、水野信元と石瀬で戦った時、正成は多くの敵を射て、また槍で突いて首を取りました。

永祿二年（一五五九）四月、尾張国大高城に兵糧を入っていた時、織田信長が鳴海近辺に出てきたとの情報が入ったため、父の忠郷や鳥居忠広などとともに、命令を受

けて尾張の形勢を探りました。

永祿三年（一五六〇）五月、尾張国丸根城に向っていた時、遊軍に加わって従軍しました。

永祿六年（一五六三）、三河国牛窪合戦では牧野成定などが小坂井まで出てきて御油と却村の間で味方を包囲して討とうとした時に、正成が最後尾を務めて進んでくる敵を射ました。その矢が鞍の前輪から後まで抜けたので、敵兵はこれに恐れをなして、進むことができずに退きました。

この年、一向宗徒の乱で、野寺に籠った逆徒等が針崎まで打って出て、正成を倒そうとしました。正成は奮戦して敵を追い払います。この時、逆徒の矢田作十郎がやってきて「敵はわずかに一人である、なんとしても討ち取れ」と兵を鼓舞しました。正成はこれを見て応戦しようと走り寄ると、相手はそのまま後ろへ引き返します。なお追いかけて、「お前は兵をおおっておきながら、どうして急いで逃げるのか」と問い質すと、作十郎は「今さらどうして軽々しくお前と生死を争うのか」と言いながら、とうとう遠くへ逃げ去ってしまいました。こうして

正成もやむを得ず引き返すことにしました。後に、作十郎がこのときの事を「もし自分が正成と戦っていたら、討ち死にしていただろう」と語ったので、聞いた人はかえってその行為をほめ称えました。

永祿七年（一五六四）正月、一揆の将である石川十郎左衛門と渡辺守綱らが、槍を手に徳川家康様の近くまで近寄ってきました。十郎左衛門は正成の伯父ですが、主君にとっては逆臣であるため、正成は彼の両膝を射抜きました。深い傷を負った十郎左衛門は陣屋に戻ると亡くなりました。また渡辺高綱の兜のひたい部分を射て倒しました。家康様はこれを聞いて、親族も顧みないほどの正成の忠功に感心しました。石川数正が家康様のお傍にいたとき、「正成がたびたび軍功をあげることは、他の家臣が真似できることではありません。決してお忘れになりませんように」と申し上げたところ、家康様も「もつともなことである」とおっしゃいました。この頃、織田信長は各家の武士の名を記し、武功のある者には自ら墨を引いて印を付けていましたが、徳川家の家来では正成が印の付いた者であったそうです。

この年の三月、御油で駿河国今川勢の兵と戦っていた時、敵の男女が櫓に登ってときの声をあげていました。味方の兵の多くがここを射ても櫓の上まで矢が届きませんでした。家康様の命を受けた正成が走り出て三回矢を放ち、そのうちの二回が櫓のなかに入ったので、敵は驚いて逃げ降りました。この時、矢に「内藤四郎左衛門」と記してあったので、敵はその矢に矢文を添えて送り返し、そこには「しばらく矢を射るのは止めよう。だが今の兵にはもう一度矢を射させてみる」とありました。家康様は、これは敵の策略なので、絶対に矢を射ることがないようにと言いました。しかし、正成は武勇をはずかしめることのないよう進み出て射ようと思いました。その時、櫓を持って道の傍らに待ち伏せしていた敵兵が急に進み寄り、まさに突こうとしたところで、正成は櫓を貫いて敵を射倒しました。このため敵味方をあげて正成をほめ称え、家康様もまた感心しました。

同じ年の九月、酒井忠尚が上野城にいた時、今川氏真と通じて背いたので、酒井忠次や本多広孝に攻めさせました。忠尚は力尽きて駿河国へと逃れたので、家康様は忠

次を呼んで、「忠尚の家は断絶したが、彼は伯父であるので、将来上野城はお前に与える」とおっしゃって、内藤信成と正成に上野城の守衛を命じました。

永禄十二年（一五六九） 正月、今川氏真の兵と遠江国掛川で戦った時、大久保忠世・大須賀康高などをはじめ、味方の兵の多くが力を尽くして戦っていた中、椋原治右衛門が首を持ってやってきました。組み合って討ち取ったと誇っていたのを大久保忠佐が聞きとがめて、「今日の戦いで組み合って討ち取った者はいなかった、治右衛門が持っている首は拾ったものであろう、自分が討ち取ったのも鉄砲に撃たれて死んだ敵である」と言っている時に、正成も首を携えてやって来ました。人々は手柄として称えましたが、正成は「今日の手柄は、自分をはじめ、皆死者の首を取ったものだ」と説明しました。忠佐が言ったとおりだったので、人々は正成の正直なところに感心しました。

元龜元年（一五七〇）、織田信長が越前国金崎に向かったので、信長を助けようと家康様が若狭国まで進軍し、正成も付き従いました。この時の正成の行動は家康様の

を率いて一言坂に到着しました。信玄と戦おうとした時、正成は見附に火を放って敵の形勢をうかがうとともに、本多忠勝と一緒に、「敵は多勢で地の利もよいので、ここで集まって戦ったら危ないでしょう。ここは速やかに兵をまとめて退くべきです。敵がもし天龍川を越えようとすするならば、その半分が渡るのを待って討ち取れば、勝利を得ることは間違いないでしょう」と申し上げると、「もつともである」と家康様もおっしゃり、諸將に命じて軍を退かせました。しかし、両軍は既に接近して戦っていたため簡単に退却できませんでした。そこで忠勝は、槍を取って馬に乗り、両陣の間を駆け、七、八度見回りました。その勢いを恐れた武田勢は進むことができず、遂にすべての部隊が退きました。信玄が怒って進軍してきたのを、忠勝は最後尾で防戦しました。

この年の十二月、三方ヶ原の戦いで、正成は家康様のもとから遠く離れて戦っていましたが、味方の先陣が敗れそうなのを見て、家康様のもとに戻って拝謁はいごうしました。この時家康様の側にいたのはわずかに七、八騎でした。正成は家康様を諫めて、最後尾の守りを務めて引き退き

意になかったものでした。

この頃、浅井長政が謀反したとの情報が入り、織田家の陣営では騒動が起り、信長も不本意ながら家康様に最後尾の守りを頼み、軍をまとめて引き返しました。途中、たびたび一揆が起こって進軍が遮られましたが、家康様は配下の兵士に命じて、三河と遠江両国の兵を一所に集めて、あちらこちらで防戦させたので、一揆も近寄ることができませんでした。しかも正成は武勇を奮って何度も矢を射て、敵兵六人を倒すとともに、ほかにも多くの者を討ち取ったので、その勇猛さに圧倒され、ほとんどの敵軍は後を追ってきませんでした。結局朽木谷まで退却することができました。家康様はその働きに感心しました。

この年、姉川の戦いに従軍し、弓を射たり槍を交えたりして忠節を尽くしました。その後、敵陣から正成が射た矢を送り返してきました。

元龜三年（一五七二） 十月、武田信玄が遠江国に出てきて、天野宮内左衛門を先導に、多々羅・飯田の両城を破って見附まで進んできました。家康様も三千あまりの兵

ました。息子の正貞は、敵陣に紛れていたため味方が退くのに気づきませんでした。正成は正貞の生死が気になるので、馬を返して敵陣に戻ると、正貞は数人の敵と戦っていました。正成は槍を取ってその敵を追い払い、敵の馬を奪い取って正貞を乗せて無事に退却しました（別の史料では、この戦いで正成は、鳥居信元とともに家康様の馬に付き従って退く時、信元は正成に対して「自分がここに踏みとどまって、敵を防いで討ち死にする。貴殿は殿を助けて退いてくれ」と言ったので、正成は「危に臨んで命を落とすのは願うところだ。お前は私より年が若いのだから、永く仕えて忠勤を尽くすべきだ。今日討ち死にするのは私である」として引き返そうとしました。信元が正成を引き留めて色々争っているあいだに、家康様が塩市口の方へ向かわれたのを危惧し、正成は息子の弥九郎に向かって、「お前が殿の身代わりになれ」と言いました。弥九郎は「もとより願うところです」と答えたので、正成は「自分が戻って討ち死にするのは簡単だが、殿に従っている者は皆若年なので不安である。自分ももし討ち死にしたら殿もまた危ない。お前が踏み

とどまるべきだ」と言いながら家康様の馬に付き従い、弥九郎は引き返して討ち死にしたと記されています。ただし、正成の子に弥九郎という者がいた証拠がないので、疑わしいところです。

天正二年（一五七四） 九月、武田勝頼が天龍川近辺に陣を構えたとの情報があり、家康様は兵士に命じて物見を出されました。正成もその一人でした。

天正三年（一五七五）、長篠の戦いでは、植村家政とともに家康様のお側に付き従いました。正成の行動は家康様の意になかったものでした。家康様が退陣した時は、最後尾を守り、槍で敵を突いて首を取りました（ある史料には、この時織田信長が使いを寄こして、「家康が先陣を指揮せよ」と言っていました。正成は「我が主人はそのような差図を他人から受けたことはありません。正成がこのような答えたと伝えよ」と言って使者を追い返しました。信長はこれ聞いて、「徳川家にはよい家臣が沢山いる」とほめ称えたと記されています。しかし、別の史料では鳥居忠広のこととなっており、通称の「四郎左衛門」が同じであるために誤記したようです）。

この年の九月、遠江国小山城を包囲しました。武田勝頼は、これを聞いて大井川近辺に陣を構えたので、家康様は包囲を解いて退却しようとした。この時正成は、山路に沿っての退却を申し上げましたが、酒井忠次は、河原に沿って敵と相対しながら退却すべきと言い、結局忠次の意見が採用されました。

天正四年（一五七六）、武田勝頼が遠江国横須賀に出陣した時、正成は物見としてその地に行きました。勝頼が退却した時、味方の兵の多くが戦おうとしましたが、正成はよく情勢を察して、兵士を抑えて戦わせませんでした。これらのことは家康様の意に沿ったものでした。

同じ年、高天神城を攻めた時、正成は城中に矢を射て多くの敵兵を倒しました。この時、敵陣から正成の矢が送り返され、一本の矢で二人を殺すのは普通の射手ではないとほめ称えられました。

天正七年（一五七九）、徳川秀忠様がまだ胎内にいらっしやう頃、正成の夢の中に白張の装束をした老人が忽然と現れて、「咲花に河内・和泉の治りて小金の橋をかくるよねくら」という歌を口ずさみました。正成は不

この年の六月、遠江国二俣城を攻めた時、正成はこれより前に誤って足に怪我をしていたため軍せず、浜松城の守りにあたっていました。家康様は夜中に二俣城を攻めました。急に風雨が激しくなってきたので、思うように兵を動かすことができなくなったので、やむなく浜松に引き返されました。この時、本多忠勝が先に人を遣わして、「今、殿が帰られる。門を開け」と言いましたが、正成は従者に命令し、門を堅く閉ざして開けません。やがて忠勝が門を叩いて叫びましたが、正成は門の櫓に上がり、「何者であるか、もし退かなければ撃ち殺せ」と言いながら鉄砲に火繩をつけさせたので、人々はたじろいで進むことができませんでした。忠勝がこの事を申し上げると、家康様はただ一騎で門の際までやってきて、「正成はここにおるか、自分は今帰った」とおっしゃいました。正成はこの声を聞くと、狭間から提灯を出して確認し、急いで櫓を下りて、自ら門を開けて入城させました。家康様はいたく感心し、「正成に城を守らせれば、たとえ敵に虚を突こうとする謀将がいても、どうして城が落ちようか」と何度もほめ称えしました。

審に思い、「どこから来たのか」と声をかけました。その老人は、「当町の八幡から」と答えて立ち去りました。目覚めた後も不審は晴れず、夜明けを待って急いで出陣し、家康様のもとに参上して事細かに申し上げました。家康様はそれを聞いて喜び、今度生まれてくる子が男子ならば必ず世継ぎにするべきだとおっしゃいました。

天正八年（一五八〇）、遠江国の色尾合戦の時には、弓や槍を取って手柄をたてました。勝頼が兵士を率いて水辺にあらわれた時、正成はたくさんの矢を射ましたが当たりません。そこで松平康安を傍に立てて矢の当たる狙いどころを告げさせ、正成はそれを踏まえてまた矢を射ました。すると敵が乗る馬の背中に矢が当たりました。馬が驚いて乗っている者をそのままそこに落とすのを見て、味方は声をそろえて笑いながら退却しました。

天正十二年（一五八四） 三月、尾張国で織田信雄と豊臣秀吉が合戦した時、信雄から援兵を頼まれたため、家康様は出陣されました。すでに敵は小牧のあたりに火をつけたと聞き、軍中の法令を定めました。正成は命をうけて、高木清秀とともに軍奉行となりました。四月六日、

秀吉は陣を楽田に移し、不在の岡崎城を攻撃しようとして、三好（豊臣）秀次を首將に、堀秀政・森長可・池田恒興などと犬山を出発して、篠木・柏井に陣を構えました。家康様はこれを聞き、榊原康政・大須賀康高を小牧山から出発させて、敵の後を追って岩崎に赴かせ、家康様自身も小牧山から動かれました。この時旗本の鉄砲隊二百人を選んで側に置き、正成も大久保忠佐・高木清秀とともに最後尾の守りを務めるように命じられました。同月九日、池田恒興らが三河国との国境に入ろうとした。榊原康政・大須賀康高はこれを見て、秀次の後ろから打って出たため、秀次の陣は混乱して崩れそうになりました。しかし、堀秀政が指示して隊列を立て直し、恒興も引き返してきたので、味方は敗走しかかっていました。家康様はこの状況を聞き、正成と高木清秀を呼んで、「敵の形勢と土地の利害、さらには富士ヶ根山の要害を見てくるように」と命じました。両者は命令を受けて先陣に向かいました。この時、先陣が崩れそうなのを見て、その事を伝えようと旗本の隊に引き返してきた先手の軍奉行の渡辺守綱に出会いました。両者は守綱に形

勢を尋ねます。守綱は、「味方が崩れそうなので、敵が何度も攻撃をしかけてきています。そのため、陣形が乱れた敵陣に旗本勢でかかれれば、必ず勝利を得られるでしょう」と答えて、旗本の隊に向かいました。正成も守綱と一緒に旗本の隊に行き、「敵は多勢であり、そのうえ勝ち誇っている、早く岡崎へ退却したほうがよい」と言いました（ある史料には、この時家康様は「物見はどうであったか」と問われたので、正成が「勝利を得たので岡崎へ退くように」と申したと記してあります。別の史料には、この戦いで本多広孝の隊列が崩れた時、高木清秀がもしこの形勢を家康様に言上したならば合戦は負けになってしまいうだろうと正成は考えました。そうやってしまっただごとではないとして、清秀よりも先に家康様のところに行き、「今こそ必死の合戦をするべきです」と申し上げました。家康様は聞き入れましたが、傍らにいた本多正信は、「正成は軽はずみな事を申すものよ」と咎めました。これを聞いて正成は「いや、合戦の事は自分に任せられよ、ともかく攻めかからせよ」と申し上げたために、結果的に勝利を得たと載せています。

しかし、別の史料の記載とも異なっています。詳細不明なので本文には載せていません。どういうわけか、家康様はただ笑いながら、「清秀はどうしているか」と質問しただけで、ほかの話はありませんでした。こうして清秀は先陣に進み、挑んでくる敵陣にまで入り、手柄をたてて首級を提げてきました。「戦いは勝ちでしょう。隊列の乱れた敵に今こそ攻撃するときです」と言いしました。守綱も同じく進言したので、家康様は「今こそ攻撃せよ」と指図し、正成と本多正信に人員を与えて出発させました。家康様も馬を進められました。先導していた渡辺守綱が良い地を見極めて立ち帰り、「長久手原の上にある富士ヶ根山こそ御旗を立てるのに良い地である」と言いしました。正成はこれを危ぶみ、疑問に感じながらもきちんと見極めてから申し上げようと、石黒善九郎を伴ってその場所に行き帰ってきてから、「守綱の言葉は正しい。速やかに進むように」と申し上げたので、やがて御旗が富士ヶ根山に立ちました（別の史料には、渡辺綱が申し上げたのを受けて、正成が仰せを受けて石黒善九郎とともに敵陣の西、岐阜嶽山と前山の間を見て

まわり、「この地に御旗を立てるように」と申し上げたので、やがてそこに陣を据えたと記し、また別の史料には、正成と清秀を斥候として遣わし、富士ヶ根山に至ってその地の様子や敵の形勢を見極めて立ち帰り、「敵は一つになっていない様子なので、富士ヶ根山へ移れば利を得られる」と申し上げました。本多正信がこれを聞いて、「小勢の隊で前後に敵を引き受けたらどうなってしまうだろうか」と危ぶんだ時、斥候として出ていた渡辺守綱・大久保忠佐が立ち帰ってきて、「速やかに富士ヶ根山へ移るように」と申し上げたので、すぐに井呂根から富士ヶ根山へ移ったと記してあります。今でもどれが正しいのか詳細は不明です。こうして正成は、高木清秀とともに鉄砲の兵を指揮して、家康様の本陣の南東にある小林山の尾崎から鉄砲を放つと、敵はこれに驚き恐れ進むことができせん。ついに池田恒興父子を討ち倒したので、敵は散り散りになって敗走しました。味方はこれを追って討ち、多くの首級を得ました。龍泉寺から約一・一キロメートル隔てたところに砂川があります。正成は、馬を横にして旗を振り、退却せよと指図したの

で、各々ここで追うのをやめて、兵をまとめて退きました。

家康様の凱旋があり、首実検を行って、諸將の武功を賞しました。その時正成は、高木清秀とともに家康様の前に進み、「豊臣家の気質は勇敢で、この敗戦を聞けば必ずやって来て戦うことになるだろう。今味方の兵はことごとく疲れているので、しばらく休ませたほうがよい」と申し上げました。これをお聞き入れくださり、軍を引き返し、小幡城に家康様が入られました。そして池田恒興の首に采配と太刀を添えて、織田信雄のもとに贈りました。丹羽六大夫と同じく、正成も命により使者を務めました。この戦いで甲斐国の先方の兵が討ち取った首級は、正成と大久保忠佐がこれを改めました。十一日、家康様の前に召されて、この度の軍功を賞せられるとともに、家康様の感心を得て金の采配を下賜され、三河国幡豆郡に領地七百石を加えられました。

天正十三年（一五八五）閏八月、信濃国上田城を攻めた時、味方の諸勢が敵に阻まれて進むことも退くことも難しくなっていました。城景茂と玉虫繁茂の兄弟が相

談し、「足輕の攻めかかり方が良くないためであり、これでは勝利を得る事は難しい」と申し上げたことにより、正成は仰せを受けて同地に向かい、「足輕の攻めかかり方をよく訓練した後に攻めかかるべき」と言いました。人々は納得せず、「訓練しなくてもその場に臨めばどのような働きでもするものだ」と言うので、正成は「訓練をすればますます疑いのない勝利になる」として、二十五人ずつに配置して、訓練した後に攻めかかると、思いのままに勝利を得て、無事に引き揚げる事ができました。敵兵はこの形勢を見て、武功ある者がいるとみて、以前の足輕の差配を替えて、よく立て直したものと賞賛しました。この戦いで正成は、大久保忠佐とともに、保科正直のところまで家康様の書状を届けました。使者の命を受けて「この度の戦いでは昼夜の戦闘が並大抵ではない。それでも怠ることがないように」との家康様の仰せを伝えました。

天正十八年（一五九〇）、小田原の戦いに従軍した時、豊臣秀吉が正成と対面したいと織田信雄を介して家康様に伝えてきました。しかし、正成は「年老いていますの

で」として辞退し、とうとう対面しませんでした。この頃、家康様は家来に領地を分け与えるため秀吉と相談しており、ある人が正成のところに来てそのことを話しました。「それは誰なのか」と問うと、「君には五千石与える予定だと聞いた」と答えました。正成はそれを聞いて、「そうだとすると過分なことである。そのほかの人々はどうなのか」と問いました。「高木清秀、牧野康成、阿部正勝などをはじめ、西尾吉次なども候補である」と答えます。さらにそのほかの人を問うと、その名を列挙しましたが、正成はそれを聞いて「自分も高木清秀などと同じように領地を賜るのは、武功の勝れた者だけへの恩賞と思っていたが、そうではない人も加わっているのは面白くない」と歎きました。こうして武蔵国埼玉郡の内にて五千石の領地を賜り、後に領地の一部にあたる栢間村に隠居し、剃髪して善宗と号しました。

慶長五年（一六〇〇）、石田三成が反逆した時、徳川秀忠様が出馬する前に、本多正信の招きによって江戸にやってきました。正信は、「この度の出陣はいかにも不安である。それというのも上方勢は十五万ほどと聞くのに、

こちらはわずかに五万あまりである。危険な合戦ではあるが秀忠様の出陣は必要不可欠なことなので、今さらどうしようもない。君は老功なので打ち明けるが、どうしたらよいか」と問いました。正成はそれを聞いて、「私はそのような心配はしていない。必ず勝利を得ることができよう。秀忠様が若年の時からお側で見てきたけれども、いつもは耳に聞いて怖がることでも、実際目にするると剛強に振る舞っていた。そういうわけで、今回もここでは不安で危険に感じているけれども、彼の地に至れば鬼神のようになるだろう。また、そうしてこそ勝利も得られるだろう。三成も要害に籠らず東海道に陣を構えると聞いている。家康様の出馬と聞けば垂井・赤坂・関ヶ原あたりまで出てきて、西国勢を頼りに野戦を仕掛け、東国の小勢を捕えようとするだろう。その時、味方は時を移さず戦いを始められよ。もし時間を置いて、敵の多勢が様々な要所に立て籠り、その要所を拠点にして互いに助けあうようなことになると、とても勝利を得る事はできない。しかし、今の東国には攻撃的な戦いを好み、ためらいのない大将が三人いる。第一に家康様、次

に井伊直政・福嶋正則である。これらは皆勇将であり、速やかな戦いを仕掛けたら、思い通り勝利を得ることができるはずだと言ったものだ」と答えました。この時家康様が正成を召して秀忠様のお供を命じられました。正成は「麒麟も老いれば驚馬（足の遅い馬）にも劣るというのに、驚馬が老いたのにどうしてそのような任にあたることができましょうか」と辞退しました。これを聞いて、「いや、接近戦をするには及ばない。乗物を使ってもよいので供をしてくれないか」とおっしゃいましたが、堅く固辞して栢間の地に帰りました（別の史料には、御出馬の後に、正成が、「この度、敵方はきつと家康様の出馬があるとは考えていないだろう。ところが着陣してそのまま合戦となれば、敵は油断しているので、必ず勝利を得られるだろう。しかし、三方ヶ原の難戦以後は懲りており、かつ家康様も年齢的に老いたために、もしためらうようなことがあれば、勝利は心もとない。自分が従軍すれば必ず利を得るようには図るのに」とある人に語った事が見えますが、疑わしいので本文には記しません）。

慶長七年（一六〇二）四月、病にかかった時、秀忠様が侍医の久志本常衡に治療を施させました。しかしついに癒えず、同月十二日、七十六歳で亡くなります。法名も善宗といひます。

いつの頃か、正成が家康様の前で話したついでに、「今より後に、自分と同じような武勇のある人があらわれることはないだろう」と言いました。傍らにいた人々はこれを不思議に思い、何故にそのように言うのかと咎めました。正成は、「武田信玄が世にあった頃は、殿が出陣するたびに自分が先手となり、一度も後れを取ったことはなかったが、信玄が死んだ後は彼に等しい敵はいない。今後も信玄のような敵が出てくれば、また自分と同じような者が出てくるだろう」と言いました（ある史料では、美濃国に老婆狐というものがいました。人を誑らかすことが巧みで、肩の上や手に乗るけれども目には見えません。若年の者達がなんとかして殺そうと様々な手を尽くしても殺せませんでした。ある時、正成は自分の腕を出して、「この手に乗れ」と呼びましたが、老婆狐は人の言葉を喋って、「その手に乗ったなら、手ともしど

も斬ろうと思って構えている。そのような人の中には乗らない」と言いました。その話を聞いた人は、正成の勇

気に感心したと記しています。このことは、別の史料では阿部正之のこととし、また別の史料では大久保忠教のこととしています。どの説が正しいのか分かりません。

正成が栢間の地に隠居をした後は、家康様が鷹狩りに出る時は必ず時服を二領ほど持って、正成のもとにお出でになってこれを与えられました。その時は正成の妻も家康様に拝謁したといひます。またある時、鷹狩りの際に栢間の地を訪ねて家康様がおっしゃるには「私は以前、どのように世を治めればお前達に大祿を与えられるのかと考えていたが、今はとにかく打算が優先して以前の志に反している。そうかといひて気にとめていない訳ではない。ただし、老を養うだけの領地は与えよう」として二千石を賜りました。

その後、また栢間の地を訪ねた時、「お前は、昔は強飯を蒸す事が上手だったが、今でもそうか」と問われたので、強飯を蒸して差し出したそうです。

正成の長男の正貞は、父の勸氣を受けて家を継ぎません

でした。次男の正成が跡取りとなりました。

この正成は、三河国に生れて、初め四郎左衛門といひました。家康様に仕えて、天正十二年（一五八四）、長久手の戦いに従軍し、慶長五年（一六〇〇）、関が原の戦いにお供をしました。

慶長七年（一六〇二）九月、近江国坂田郡に二千石を増され（別の史料には、この年に領地を継いだとありますが、正成は慶長五年以前に剃髪して栢間の領地に隠居していたので、これより前に家を継いでいたことは明らかです。そのためここでは省略します。また、ほかの史料を参考にすると、加増二千石の領地は、父の養老料としていただいたもので、死後もそのまま加増として賜ったものなのでしょう。しかし、根拠がなく本文には加えずらるので、ここに記して後の考察に任せます）、合わせて七千石を知行して、後に伏見城代となりました。

慶長十年（一六〇五）十二月十二日、四十二歳で亡くなりました。法名は淨安といひます。

その子の忠俊は、初め新五郎といひました。父の領地を継いで五千石を知行し、二千石を弟の正成に分け与えま

した。後に御書院の番士となり、寛永八年（一六三二）二月、長年の不正があったために改易させられて家は絶えましました。

そのまま逃げていきました。

補遺（天正十二年正月、掛川合戦の条）二十三日の曉に、正成は渡辺守綱等と同じく先駆けとして忠戦を尽くします。敵が敗北して退却するに乗じて、正成・守綱及び服部半蔵が後を追って、城門に至ります。この戦いは夜を通しての戦いになったので、誰も目印となる指物は用いませんでした。ただ、小坂新助だけが灯笼の指物を用いたので、夜が明けるほどによく見えて、彼が一番に城へ達するように思われましたが、実際に惣門に入ったのは正成と守綱の二人でした。

補遺（天正三年、三方ヶ原合戦の条）味方が退くのを見て敵が後を追って来たところ、天野康景が金の馬鎧をつけた武者に馬上から槍をつけました。この時、弓を持った敵一人が、歩いて塚の陰から家康様のお側近くに忍び寄ってきました。正成がこれに気づいて「こちらにも弓取りがいる」と声をかけ、前に出て射ようとしたところ、康景が素早く馬を乗りつけて追いかけたので、その敵は

一 『干城録』巻第百二十一

内藤

四郎左衛門藤原正成八甚五左衛門忠郷か二男なり。三河に生る〔寛永譜〕。はじめ甚一郎といふ〔貞享内藤左京亮書上・別本家伝〕。幼稚のときより伯父弥次右衛門清長に属して三河国上野城にあり。

天文十一年十二月、織田弾正忠信秀の兵五騎はかり斥候として城近く来たりしか八、討とらんと城中の兵馳出けるに、正成ごとし十六歳なりしか、衆に先たちて鐘を合せ高名を顕ハしけり〔寛永譜〕。

此月、尾張の国の士新兵衛といへる者兵を率ゐて夜中不意に上野城を襲ひ、既に二丸まで攻めたり〔寛永譜・別本家伝・家忠日記増補〕。此時正成弓を携へ百さしの土俵鞆をつけ、走り出てこれを射る。敵辟易して遁れいつ。正成勝に乗て頻りに是を射たりしかは、矢既に尽んとせしとき、傍に怪しき童子一人あり。正成此童に対し、汝矢をとりて来たれといふ。其時童走りて悉く矢を拾ひて帰る。かくてまた射る程に、遂に勝利を得て敵死傷す

る者二百人はかり、是正成か弓勢の故なり〔寛永譜・近代諸士伝略〕○按するに別本家伝・武徳大成記・家忠日記増補等にハ、弥次右衛門清長と共に正成進三戦ひて敵數十人を射たりしか八、尾張の国士ら進三かねて引退くとしるせり。○広忠卿聞しめし其戦功を感じ給ひ、勸賞として三河国幡豆郡のうちにて采地を賜ふ〔寛永譜・別本家伝・武徳大成記〕。弥次右衛門清長も此功を賞して七所拵の刀を与へ、松平弥右衛門某も家の目貫・笄を授けり。

ことし、三河国安城の兵上野を襲ひしとき、敵將先陣に進三諸卒を下知して攻寄しか八、御方の諸士討て出て挑三戦ふ。正成八衆に先立て三十間はかり進三出けるか、かの敵將と鐘を合せ、遂に突伏て首をとる。かゝりしか八敵兵利を失ひて敗走す。清長此働を感じて鐘・脇指を与ふ〔寛永譜〕。

弘治三年、刈屋合戦の時も鐘にて敵を突伏首級を得たり。また弓取て敵兵あまたを殲す〔寛永譜・大三川志〕。永禄元年二月、水野下野守信元と石瀬に戦ひ給ふ時、正成多く敵を射、また鐘にてつき首級を得たり〔武徳大成

記・大三川志。

同二年四月、尾張国大高城に兵糧を入させ給ふ時、織田右府鳴海の辺に出張すと聞えしかハ、父忠郷、鳥居四郎左衛門忠広等と仰をうけて尾張の形勢を窺ふ〔寛永譜〕。同三年五月、同国丸根の城に向ハせ給ふ時、遊兵に加ハりて従ひたてまつる〔武徳大成記〕。

同六年、三河国牛窪合戦に牧野右馬允成定等小坂井に出張し、御油と却村の間にて御方をつゝみて討んとせし時、正成後殿して進む敵を射る。その矢鞍の前輪より後までぬけたりしかハ、敵兵是に懼れけん、進み得ずして退けり〔按ずるに原文にハ、是を一向一揆の後とす。今正史に参考するに、その前として事実になかへり。故に改めしるす。〕。

ことし、一向宗の徒叛きし時、野寺に籠りし逆徒等針崎に討て出、正成を討んとす。正成奮戦して敵を逐ふ。逆徒矢田作十郎馳來たりて、敵ハ纒に一人なり、いかにして討とらざると勵せり。正成是を見て戦ハんと馳よれハ、其まゝ跡へ引かへす。猶追かけて、汝諸卒をのゝしりなからいかて速に遁去やと語りしかハ、作十郎聞て、我今

何の心ありてか軽々しく汝と死生を争ハんといひながら、遂に遠く逃去れり。されハ正成も止事を得ず引かへす。其後作十郎此事を人に語りて、若我正成と戦ハ、必討死すへかりしといひしかハ、聞人却りて美称したりしとぞ〔寛永譜〕。

同七年正月、一揆の將石川十郎左衛門・渡辺守綱等鐘とりて東照宮の御座近く進みよる。十郎左衛門ハ正成か伯父なれとも、君のためにハ逆臣なりとて、かれか両膝を射貫たり。痛手なりしかハ陣屋に歸りて遂に死す〔寛永譜・大三川志・成功記・太平夜談抄〕。また渡辺源五左衛門高綱かうち曹を射て倒す〔三州土呂一揆濫觴記・大三川志〕。東照宮これを聞しめし、正成か親族を顧みず忠功を励ますことを感じ給ふ〔大三川志○按ずるに貞亨内藤左京亮書上・別本家伝にハ、渡辺高綱を正成か伯父なりといふ。されとも渡辺と親族たる事所見なければとらす。〕。石川伯耆守数正御傍にありけるか、正成しハく軍功を顕ハす事他に異なり、忘れさせ給ふ事なかれと言上しけれハ、東照宮尤なりとの給ひき〔寛永譜〕。此ころ織田右府家々の諸士の名をしるし、武功ある者に

ハみつから墨を引てしるしとせしに、東照宮の御内にてハ正成点のかゝりし者なりとぞ〔貞享内藤左京亮書上・別本家伝〕。

ことし三月、御油にて駿河国の兵と戦ハせ給ふ時、敵の男女櫓にのほり鯨波をあく。御方の兵多く是を射れとも櫓の上までいたらさりしかハ、東照宮の仰をうけ、正成馳出て三度矢を放ち両度櫓のうちにいりけれハ、敵驚きて逃下れり〔寛永譜・武徳大成記〕。此時矢に内藤四郎左衛門としるしありしかハ、敵其矢を贈り矢文をそへて、暫く矢軍をとゝむへし、されとも此兵に今一度矢を放たせ給へとあり。東照宮是敵の謀なり、必射ることなかれと止め給ひけれとも、正成武勇たゆまず進み出で射んとせし時、敵兵櫓をもて道の傍に伏あたるか、是を見て速に進より既に突んとしたりしを、正成彼櫓を透して敵を射倒す〔寛永譜・武徳大成記・武徳編年集成〕。かゝりしかハ、敵御方挙りて是を美称し、東照宮もまた感じ給ふ〔寛永譜・武徳編年集成〕。

同年九月、酒井忠高上野城により今川氏真に志を合せて叛きしかハ、酒井左衛門尉忠次・本多豊後守広孝して攻

させ給ふ。忠高も力尽て駿河国に遁れし時、忠次をめされ、忠高が家既に断絶す、かれハ伯父なれハ後年上野城を汝に与へんとの給ひて、内藤信成と正成とにかの城の守衛を命し給ふ〔武徳編年集成・大三川志〕。

同十二年正月、今川氏真の兵と遠江国掛川にて戦ハせ給ふとき、大久保七郎右衛門忠世・大須賀五郎左衛門康高等をはしめ御方の兵多く力戦せしに、棕原治右衛門首を提來たり、細討せしとほごりしを、大久保治右衛門忠佐聞咎め、けふの戦ひに細討なし、汝か持たる首八拾ひしならん、我が討とりしも鉄炮にうたれて死したる敵よといひける時、正成も首を携來たり、人々高名したれともけふの手からハ我をはしめ皆死首なりといふに、忠佐がいひし辞と同じけれハ、人々其偽なきを感じあへり〔大久保家記・家忠日記増補・浜松御在城記〕。

元龜元年、織田右府越前国金崎に発向せしかハ、これを援け給ハんとて若狭国まで進ませ給ふに従ひたてまつる。此時の進退よく御旨にかなひしとぞ〔寛永譜〕。

此頃、浅井備前守長政謀叛すと聞えしかハ、織田家の諸陣騒動に及び、右府も心ならず東照宮に後殿の事をたのミ

まいらせ、軍をまとめて引かへす。途中し八く一揆起りて前後を遮りしかとも、東照宮諸士に下知し給ひ、三河・遠江両国の兵を一所にまとめ、こゝかしこ防戦せさせ給ふにより一揆も近より得ず〔朝倉家記〕。かつ正成勇を奮ひてし八く、矢を放ち敵兵六人を殪し〔寛永譜・近代諸士伝略・武徳編年集成〕、その外多く討取しか八、其勇猛なるに辟易して諸方の敵軍跡を追ハす。遂に朽木谷まで退き給ふ〔朝倉家記〕。東照宮其衝を感じ給ふ。ことし、姉川の役に供奉し、或ハ弓射、或は鐘を合せて軍忠を励ます。其後敵陣より正成か射たる矢を贈り返しけり〔寛永譜〕。

同三年十月、武田信玄遠江国に出張し、天野宮内左衛門を郷導とし、多々羅・飯田の両城を抜き見附に進む。東照宮も三千余の兵を率ゐて一言坂にいたり信玄と戦ハんとし給ふ時、見付に火を放ちて敵の形勢を察し、本多忠勝と共に言上しける八、敵多勢にして地の利もよし、御方募りて戦ハ、危からん、速に兵をまとめて退き給ふへし、敵もし天龍川を越んに八、その半渉るを待て討とらんに、利を得んこと疑なしとまうしけれ八、尤なりとの

ひまに、東照宮塩市口の方へいたらせ給ひことに危く見えしか八、正成、男弥九郎にむかひ、汝君の御身にかハらんやといひけるに、弥九郎聞て、是元よりねかふ所なりと答へしか八、又正成いふやう、我返して討死せん八易けれども、君に従ひたてまつるもの皆若年なれ八覚束なし、我もし討死せ八君もまた危からん、汝こそ踏と、まるへき所なれといひつゝ正成八御馬に従ひ、弥九郎八やかて引返して討死すと記したり。寛永譜載る所と同じからず。且正成か子に弥九郎といふ者所見なけれ八、とかく疑ハし。

天正二年九月、武田勝頼天龍川の辺に陣とると聞えけれ八、諸士に命せられ物見を出し給ふ。正成も其一人なり〔武徳大成記・武徳編年集成〕。

同三年、長篠の役に八植村出羽守家政と共に介副として従ひたてまつる〔長篠軍記・四戦紀聞〕。正成か進退よく御心になひたり。御退陣の時後殿し、鐘にて敵をつき首級を得たり〔寛永譜〕○按するに常山紀談に、此時織田右府使して、先陣を下知せられよといひけるか、正成答へて、我主ハさる事の指揮を他人より受たる事なし、

給ひ、諸將に命して軍を退かせ給ふ。しかるに両軍既に接戦して容易引取かたけれ八、忠勝鐘とりて馬につち乗、両陣の間を馳て巡視すること七、八度、敵其勢に恐れけん、進み得ず遂に諸隊悉く退きしか八、信玄いかりて進ミ来たりしを、忠勝後殿して防戦す〔続本朝通鑑〕。ことし十二月、三方原の役に正成遠く旗下を離れて戦ひしか、御方先陣敗せんせしを見て旗下に馳まいり拝謁す。此時供奉の徒纒に七、八騎なり。正成諫たてまつり後殿して引退く。男甚一郎正貞は敵陣に紛れいり御方の退くをしらさりし故、正成かれか死生おほつかなかく馬をかへして敵陣に馳いれ八、正貞敵数人と戦ひ居たり。正成鐘とりてその敵を追退け、敵の馬を奪ひ取正貞をのせて退きたり〔寛永譜〕○按するに碎玉話に八、此役に正成、鳥居四郎左衛門信元と共に御馬に副て退く時、信元、正成に對ひ、我ハこゝに踏と、まり敵を防ぎて討死せん、汝ハ君に従ひたてまつりて退くへしといひけれ八、正成聞て、危に臨ミ命を殞すハねかふ処なり、汝ハ我より年若けれハ永く仕へて忠勤を尽すへし、けふの討死ハ我なりとて引返さんとす。信元、正成をととめ、とかく争ふ

正成かく答へたりとまうされよといひて使を追かへしけれ八、右府聞て、徳川家にハよき侍其数をしらすと称美せしと載せたり。されとも三河之物語によるに、鳥居四郎左衛門か事なるを、通称同じき故誤りしならん。故にとらふ。

是年六月、遠江国三股城を攻給ふ時、正成ハ是より先過ちて足に疵つきしかハ供奉せすして浜松城を守衛す。東照宮夜中かの城に戦ひ給ひしか、俄に雨風烈しく進退御心に任せさりけれ八浜松に引取給ふ。此時本多忠勝御先に人をはせ、唯今君の帰らせ給ふ、門を開けといひしかとも、正成従者に下知し、堅く戸さして開かず。やかて忠勝門を叩きて呼ハリけるに、正成門の櫓に上り、何者なるや、もし退かされはうち殺せといひつゝ鉄炮に火繩をつけて下知しける故、人々辟易して進み得ず。忠勝此よしを言上しけれ八、たゞ御一騎にて門の際までいたらせ給ひ、四郎左衛門ハこゝにありや、我今帰れりとの給へ八、正成此御声を聞て、狭間より挑燈を出して見定め、急き櫓をおりみつから門を明て入たてまつる。御感のあまり、正成に城を守らすれ八、仮令敵に虚を窺ふ謀將あ

りとも、いかて侵すことあるへきと再三称誉し給ひたり
〔碎玉話・大三川志〕。

同年九月、遠江国小山を圍給ふ。武田勝頼是を聞て大井川の辺に陣取れ八、東照宮圍を解て引んとし給ふ。此とき正成、山路に添て退き給へと言上しけれとも、酒井左衛門尉忠次ハ、河原にそひ敵にむかふ体にて引給ふへしといひけれハ、遂に忠次か言に任せ給ふ〔寛永酒井譜〕。

同四年、武田勝頼遠江国横須賀に出陣せし時、正成物見として彼地にいたる〔寛永譜〕。既に勝頼退く時御方の兵多く戦ハんとせしかとも、正成よく軍機を察し士卒を諫めて戦ハせず。是らの事よく御旨にかなひしとぞ〔寛永譜・諸家系図〕。

同年、高天神城を攻給ふ時、正成城中に矢を放ち多く敵兵を殲す。此時敵陣より正成か矢を贈り返し、一箭に両人を殺せしハ尋常の射手にあらずと美称しけり〔寛永譜〕。

同七年、台徳院殿胎内におハせし頃、正成か夢中に白張の裝束したる老人忽然とあらハれ、咲花に河内・和泉

の治りて小金の橋をかくるよねくら〔按するに翁物語にハ、結句、わたすよなくらに作る。〕といふ歌を口ずさみたり。正成見咎め、何れよりかまいりしといふ。かの老人、当町の八幡よりと答へて立歸れり。目覚て後不審はれず。夜明を待て速に登營し、御座近く伺候してつふさに言上す。東照宮聞しめして悦ハせたまひ、此度の出生男子ならハ必世嗣になすへしとの給ひけり〔神君語類・翁物語〕。

同八年、遠江国色尾合戦の時ハ、或ハ弓、或は鐘とりて高名を顕ハす〔寛永譜〕。勝頼士卒を引具し水辺に臨みける時、正成矢あまた射たりしかともあたらず。松平石見守康安傍に立て矢のあたるへき図をさとせしかハ、正成心え猶矢を放ちしに敵の乗たる馬の三途にあたりしかハ、馬驚きて乗たる者其俛そこへ落ちるを見て、御方同音に笑ひて退く〔寛永大草松平譜〕。

同十二年三月、尾張国にて織田信雄と豊臣太閤合戦の時、信雄より援兵を乞まうすにより御出陣あり。はや敵ハ小牧のあたりに火を放つと聞しめし軍令を定め給ふ。正成命をうけて高木清秀と、もに軍奉行となる〔寛永高木

譜・高木深広録・長久手戦話〕。四月六日、太閤陣を栗

田に移し、岡崎の空虚を討んとて三好秀次を首將とし、堀秀政・森長可・池田勝入等を副、大山を発し篠木・柏井に陣とらず。東照宮聞しめし、榊原小平太康政・大須賀五郎左衛門康高して小牧山を発し、敵の跡を慕ハせ岩崎に赴かしめ給ひ、小牧山を御動座あり〔高木深広録〕。

此時御旗本より鉄炮の卒二百人を撰てさし添られ、大久保忠佐・高木清秀と、もに正成後殿すへしと命せらる〔長久手記〕。同月九日、池田勝入等三河の境にいらんとす。榊原康政・大須賀康高是を見て、秀次か後より撃て

かゝりしかハ此陣みたれて靡きしかと、堀秀政下知して備を立直し勝入も引返して進ミけれハ、御方此ために敗走せんとす〔高木深広録・四戦紀聞〕。按するに長久手御陣物語にハ、此時正成、清秀とともによき図を見て鉄炮をうちかけしに、敵色めきけれハ、正成軍の勝敗をはかり御旗本にまいりしと記したれとも、詳ならされハ今本文に省く。東照宮事のよし聞しめし、正成と高木清秀とを召れ〔寛永譜・貞享高木書上・高木深広録、敵の形勢・土地の利害ならひに富士か根山の要害をも見てま

いれと命し給ふ。兩人奉ハりて御先にまいる〔長久手戦話〕。此時御先手の軍奉行渡辺守綱か先陣利を失ふを見

て、其事を言上せんと御旗本に引返すにあへり。兩人守綱に形勢をとふ。答へて、御方利を失ひ敵頻りに追來たり、此乱れ足の敵陣へ旗本の勢を懸給ハ、必勝利あるへしといひ捨て麾下にまいる。正成も守綱に俱して同じく麾下にまいり、正成は敵多勢にして殊に勝ほこれり、早く岡崎へ引とらせ給へとまつす〔按するに武事紀談にハ、此時東照宮物見ハいかととハせたまふ。正成答へたてまつりて、御勝なるへけれハ岡崎に引とらせ給へとまうせしよし記し、武功雜記・前橋旧蔵圖書には、此役に本多豊後守広孝か備崩れし時、正成おもふに、高木清秀もしこの形勢を言上せハ合戦負させ給ふへし、されハ易からざる処なりとて、清秀に先たちて御前に候し、今日必死の合戦し給ふへしと言上す。東照宮御許容ありしに、本多正信御傍に在けるか、正成ハ疎忽の事をまうすもの哉と咎めしかハ、正成聞て、いな合戦の事ハ我に任せられよ、ともかくもかゝらせ給へとまうせし故、遂に御勝利となりしと載せたり。されとも他書にしるすと同

しからず。詳ならされハ今本文に記さず。いかなりけん、東照宮たゞ笑ハせ給ひ、清秀ハいかゞせしやと問せ給ふ外さらに御説なし。かくて清秀ハ先陣に進ミ競ひかゝれる敵陣に馳いり「高木深広録・渡辺図書頭長湫記・武徳編年集成」、高名して首級を提来たり、戦ひハ勝なるへし、敵の乱れ足を攻撃給へとまうす。守綱も同じくすゝめたてまつりしかハ、さらハかくれと下知し給ひ、正成と本多正信とに人数をそへられうち立せ給ふ「高木深広録・渡辺図書頭長湫記」。東照宮も御馬を進め給ひ、渡辺守綱御先をかけ、よき地を見極め立帰り、長久手原の上富士が根山こそ御旗を建んによき地ならんといひけれハ、正成是をあやふミ、夫ハいかゞ、猶見極めてまうさんと、石黒善九郎を俱して彼地にいたり馳帰りて、守綱か言いとよし、速に進め給へとまうすにより、やかに御旗を富士が根山に建給ふ「大三川志〇按するに四戦紀間にハ、渡辺半十郎則綱かまうすに任せ、正成仰をうけて石黒善九郎と共に敵陣の西、岐阜嶽山と前山の間を見めぐり、此地に御旗を建させ給へと言上せしかハ、やかに其処に御陣をすへ給ふと記し、長久手戦話にハ、正成

と清秀を斥候として遣ハされしかハ、富士が根山にいたり其地のやう、敵の形勢を見極めて立帰り、敵ひとつにならざる程富士が根山へ移らせ給ハ、利を得給ハんとまうす。本多正信是を聞、小勢にて前後に敵を引うけなはいかゞならんとあやふむとき、渡辺守綱・大久保忠佐斥候として出たりけるか立帰りて、とく富士が根山へ移させ給へとまうしけれハ、直に井呂根より富士が根へうつらせ給へりと記せり。いまた何れか詳ならず。かくて正成、高木清秀と共に御鉄炮の卒に指揮して、御本陣の巽小林山の尾崎より鉄炮を放たせけれハ、敵是に辟易して進みえず。遂に池田勝入父子討られハ敵散々に敗走す。御方是を追討て多く首級を得たり「四戦紀聞」。龍泉寺より十町ばかり隔て砂川といふあり。正成馬を横にし塵を振て、引取へしと下知しけれハ、各こゝにて追つまり兵をまとめて退きけり「渡辺図書頭長湫記・四戦紀聞」。

御凱旋ありて討取し首実検し給ひ、諸將の武功を賞し給ふ。時に正成、高木清秀とゝもに御前にすゝミ、豊臣家ハ性勇敢にして、此敗れを聞ハ必来たり戦ふへし、今御

方の土ごとく倦つかる、しハらく士卒を休め給ふへしとまうす。則御許容ありて軍をかへし給ひ「高木家譜・武徳大成記」小幡の城に御馬を入させ給ふ「寛永高木譜・四戦紀聞」。かくて池田勝入か首に采幣及び太刀を添て織田信雄のもとに贈り給ふ。丹羽六大夫と同じく正成仰をうけて御使をつとむ「武徳大成記・四戦紀聞」。此役に甲斐国先方の士の討取し首級をハ、正成及び大久保忠佐仰をうけて是を改む「景憲物語・四戦紀聞・紀伊国物語」。十一日、御前にめされて此度の軍功を賞せられ、御感を蒙り「寛永譜・諸家系図」金の采幣を賜ひ「小栗家譜」、三河国幡豆郡のうちにて采地七百石を加へらる「寛永譜・家譜・近代諸士伝略」。

同十三年閏八月、信濃国上田城を攻させ給ひし時、御方の諸勢敵に支へられ進退難儀に及ひしかは、城景茂・玉虫繁茂兄弟しめし合せ、とかくハ足軽の掛やうよからぬ故なり、かくてハ勝利を得る事かたしと言上せしにより、正成仰をうけて彼地にむかひ「永日記・前橋旧蔵聞書」足軽の懸やうよく調練して後かくへしといふ。人々いなミて、さらすとも其場に臨まハいかなる働

もすへきなりといふに、調練せハ猶疑なき勝利ならんとて、二十五人つゝ分備へ、調練してのちかけしかハ、おもひのまゝに勝利を得て、故なく人数を引揚たり「武功雑記・前橋旧蔵聞書」〇按するに武功雑記にハ、是を慶長五年の上田陣とし、前橋旧蔵聞書にハ、年代を記さず、たゞ真田陣の時とあり。慶長五年とする時ハ、正成致仕の後なれハ誤ること明けし。故に今改めしする。又按するに古人物語にハ、昔真田吉岐を攻させ給ひし時、足軽勢敗軍す。時に酒井左衛門及び正成を遣ハされしかともすへきやうなく、玉虫次郎九郎をかたらひしに、今の足軽を国に帰し別に撰ミてかけらるへし、初の足軽ハ臆したる故なり、必行先に切所あるへしといふに任せ、悉く足軽を引かへて懸しかハ、おもひのまゝに勝利を得たりと記せり。いまた何れか是なる事をしらす。敵兵是形勢を見て、武功の者あると見えて先の足軽記りに引かへ、よくとゝのひたりとぞ賞しける「永日記・前橋旧蔵聞書」。此役に大久保忠佐と共に仰をうけて、保科弾正忠正直か許へ御書を賜ふ。御使をうけ給ハリ、此度の役昼夜の勤労大かたならし、猶怠るへからざるむね仰を

伝ふ（会津家臣西郷頼母所感文書○按するに此御書、新編会津風土記に載せられたる御使の事他に所見なく、又御書の末に閏八月廿八日との三ありて年代詳ならず。されとも此役の事として事実になかへハ、推考してこゝに収む。）。

同十八年、小田原の役に属せしとき、豊臣太閤、正成に對面せんと織田信雄して東照宮に伝ふ。されとも正成年老たればとて辞して遂に對面せず（寛永譜）。此頃麾下の諸士に領地を分ち賜ふ事を太閤と議し給ひしかハ、ある人正成か許に來たりてかくとづく。夫ハ誰々なりやと問ふに、かの者答へて、先そこにハ五千石賜ふへきよしを聞けりといふ。正成聞て、さもあらんにハ過分の事なり、其他の人々ハいかにと問ふ。高木主水助清秀・牧野半右衛門康成・阿部善右衛門正勝等をはじめ、西尾小左衛門吉次等なりといふ。猶其他の人を問ふに、其名をかそへて語りしかハ、正成聞て、我も高木清秀等と同じく采地を賜ハらハ武功勝れたる者の三と思ハんに、さもなき人の加ハれるハ心よからすと歎きけり（武功雜記）。かくて武蔵国埼玉郡さいたまの内にて五千石の采地を賜ハリ（家

譜・武徳大成記・家忠日記追加）、後采地のうち柏間村かしらに閑居し、薙髪して善崇と号す（家譜・武功雜記）。

慶長五年、石田三成叛逆の時、台徳院殿御出馬の前、本多正信の招きによりて江戸にまいる。正信いふやう、此度の御出陣ハいかにも覺束なし、さるハ上方勢凡十五万はかりと聞ゆるに、こなたハ僅に五万余なり、危き合戦なれとも御出陣なくてハかなハぬにより、いかにともせん方なし、そこハ老功なれハ告るなり、いかとおもふと問ふ。善崇聞て、我ハさもおもハす、必勝利を得給ふへし、御若年の時より御側にありて見たてまつるに、常に聞おちハし給へとも御目にふるゝ時ハいかにも剛強にましませり、されハ此度もこゝ許にてハ覺束なくあやふみ給ふやうなりとも、彼地にいたらせ給ひなハ鬼神のごとくましまさん、さてこそ御勝利有へけれ（続明良洪範）、又三成も要害に籠らす海道に屯すと聞えたり、御出馬と聞なハ垂井・赤坂・関原辺に出張し、西国勢を憑たよりて野合の合戦し、東国の小勢を擯へらにせんとはかるへし、其時御方時を移さず戦をはじめられよ、もし時日を移して敵の多勢所々に桶籠り、要害によりて互に力を援なハいか

てか勝利を得らるへき（武功雜記）、然るに今東国方に突かゝりの戦心を好み、猶予なき大将三人あり、第一に東照宮、次に井伊直政・福嶋正則なり（武功雜記・続明良洪範）、是皆勇將にして速に合戦有へけれハ、はたして御勝利有へしとハいひしなりと答ふ（武功雜記）。此時東照宮、善崇をめされて、台徳院殿の供奉を命せられしか、麒麟も老ぬれハ驚馬に劣るとまうすを、驚馬の老

たるなれハいかてその任にあたるへきと辞しまうす。是を聞しめし、いな接戦するに及ハす、たゞ乗物に助けられても從ひ往へしとの給ひしかとも、固く辞したてまつりて閑居に帰る（続明良洪範○按するに永日記に、御出馬の後、善崇ある人に対ひ、此度敵方にてハ極めて御出馬有へしとハおもひかけし、然るに御着陣有と其まゝ御合戦あらんに、敵不慮の事なれハ必勝利を得給ふへし、されとも三方原御難戦の後ハこりさせ給ひ、かつ御齡も長し給ふ故、もし猶予し給ふ事もあらんか、さてハ御勝利心もとなし、我從ひまいらハ必利を得給ふやうはかるへきものをと語りし事見えたれとも、疑ハしけれハ本文に記さず。）。

同七年四月、病にかゝりしとき、台徳院殿、侍医久志本左京亮常衡して療養を加へさせたまふ。されとも遂に愈すして、同月十二日、七十六歳にして死す（寛永譜・近代諸士伝略）。法名も善崇といふ（寛永譜）。

いつの頃にか善崇、東照宮の御前に候して物語の序、今より後我にひとしき武辺者はあるへからしといふ（永日記・前橋旧蔵聞書・明良洪範）。傍にありつる人々是をあやしみ、何故にかくハまうすと咎む（故老物語・明良洪範）。善崇答へて、武田信玄の世にありし頃ハ御出陣毎に我御先手の押をしけるか、一度も後れをとりたる事なかりしかとも、信玄死して後ハ彼にひとしき敵なし、此後とても信玄かこと敵あらハ、又我にひとしき者も出来ぬへしといひけり（永日記・前橋旧蔵聞書・明良洪範○按するに永日記に、美濃国に老婆狐といふあり。人を誑らかす事巧にして肩の上、或ハ手に乗れとも目に見えず。若年の者ともいかにもして殺さんと心を尽せしかと事ならず。ある時善崇をの腕を出して、此手にのれと呼ハりしかハ、老狐人言をなして、其手に乗たらんにハ手ともに斬らんとおもひ構へられたり、さる人の手に

ハのらしといひけり。聞人善宗か勇氣を感せしと記せり。此事古人物語にハ、阿部四郎右衛門正之とし、鳩巢小説にハ、大久保彦左衛門忠教か事とす。いまた何れか是なる事をしらす。」。

善宗閑居せし後ハ、東照宮御放鷹として出させ給ふ毎に必時服二領ほとり持せたまひて、善宗か許に渡らせ給ひて是を賜ひたり。其時妻も拜謁せしといふ〔武功雜記・前橋旧蔵簡書〕。又或時御放鷹の序、閑居を訪ハせ給ひ仰有けるハ、我先にハいかて世を治めなハ汝等に大祿を与へんとおもひしか、今ハとにかく算勘にかゝつらひて先の志に悖れり、さりとて等閑にハ思ハす、たゞ老を養ふまでの采地を与ふへしとて二千石を賜ひけり。

其後また閑居を訪ハせ給ひし時、汝昔は強飯を炊く事に勝れしか、今はいかにと問せ給ひしかハ、うけ給ハりて蒸てまいらせしとぞ〔統明良洪範〕。

其子甚一郎正貞ハ父か勘氣をうけて家を継す。一男右京進正成〔按するに家伝、安成につくる〕。家嫡となる〔家譜〕。

正成、三河に生れ〔寛永譜〕、はしめ四郎左衛門といふ

四郎左衛門正成伝

補遺 〔天正十二年正月、掛川合戦の条 廿三日の晝に、正成、渡辺守綱等と同じく先登にすゝみ忠戦を尽したり〔松原自休手録・渡辺本三河記〕。敵敗北して引くる所、正成・守綱及び服部半蔵跡を逐てつけいり城門にいたる〔国朝大業伝記・大三川志〕。此軍夜をこめての戦ひなりけれハ、誰もさし物をハ用ひさりしに、小坂新助のみ燈籠のさし物をさしたりけれハ、夜明る程にさやかにあらハれて、かれ先登せしとみえたれとも、早く惣門にいりたるハ正成と守綱の二人なり〔武徳大成記〕。

補遺 〔天正三年、三方原合戦の条〕 御方退くを見て敵跡を慕ひて追來たるを、天野康景金の馬鎧かけたる武者を馬上より鐘つけたり。此時弓持たる敵一人歩行にて塚の陰より御側近く忍ひよるを正成見とめて、こなたにも弓とりありと声をかけ馳出て射んとしけるに、康景早く馬を乗つけ逐かけしかハ、彼敵其まゝ遁れさる〔寛永天野譜・貞享天野書上・近代諸士伝略〕。

〔家譜〕。東照宮に仕へたてまつり〔寛永譜〕、天正十二年、長久手の役に扈從し、慶長五年、関原御陣に供奉す。

同七年九月、近江国坂田郡のうちにて二千石を加へられ〔按するに家譜にハ、此年、遺跡を継と記したれとも、正成、慶長五年前薙髪して采地に閑居すといへハ、是より先に家を継しこと明らかなり。故にこゝにハ省く。また統明良洪範を参考するに、こゝにいふ加恩二千石の地ハ父か養老の料なりしを、死後其俣加恩として賜ひしならん。然れとも今猥りに推考して文を加へかたけれハ、こゝに并して後勘に備ふ。〕、すへて七千石を知行し、後伏見の城代となる。

同十年十二月十二日、四十二歳にして死す〔家譜〕。法名を淨安といふ〔寛永譜〕。

其子図書助忠俊ははしめ新五郎といふ。父か遺跡を継ぎ五千石を知行し、二千石を弟織部正正成に分ち与ふ。後御書院の番士となり〔家譜〕、寛永八年二月、累年不正の事あるにより改易せられて家たゆ〔家譜・江城年録〕。

内藤

二 『寛永諸家系図伝』 藤原氏内十冊之内三 秀郷流

四郎左衛門尉

はじめ伯父弥次右衛門に属して上野の城にあり。天文十一年十二月、上旬に織田彈正忠信秀の兵五騎物見として上野の城にきたる時、城中の兵はせずみて是をうたんとす。こゝにをひて正成衆兵にさきたちて相まじハリ、鐘を合鐘下の高名を得たり。此とき正成十六歳なり。

同月二十四日、尾州のさぶらひ新兵衛といふもの兵を率て夜中に上野の城を襲、すでに二丸に入時、正成弓を持、百人の土俵鞆をつけ、はしりいで、是を射ける間、敵城中をいで、しばく相たつかふ。正成勝にのりてこれを射、矢すでにつきんとする時、かたはらに童一人ありけるに、正成彼に告ぐ、汝いそぎ矢をとりてきたるべし、といふ。その時童はしりゆきて矢を抱きたる。是によりて大に勝利を得、敵すでに死傷するもの二百餘人。

これ正成がよく弓を射けるちからなり。翌日、廣忠卿此事をきこしめし、其戦功を感じたまひ、はじめてめしだされ、三州羽角村にをひて采地をたまハる。伯父弥次右衛門もまた此功を感じ七所拵の刀をあたふ。松平弥右衛門尉も是を褒て家の目買・弁をさづく。同年、三州安社の兵上野の城を襲、ときにその武將陣頭にすゝみ諸卒を下知して競きたる。味方突いでゝあひたゝかふとき、正成味方にさきだつ事三十間ばかりにして、彼部將と鎧をあハせ其首をとる。こゝにをひて敵兵利をうしなひて引しりぞく。弥次右衛門これを感じて鎧ならびに腋差をあたふ。

弘治三年、三州刈屋合戦のとき、正成鎧をもちて敵兵を縦、その首を得たり。目言をもちて射殺ものも亦おほし。永祿六年、三州本願寺門徒一揆のとき、其徒五人野寺よりいで針崎にをひて正成をうたんとしけるところに、正成これを撃ちちらす。時に矢田作十郎はせきたり匂けるは、敵ハわづかに一人、味方ハ五人なり、なんぞ討事を得ざるや、といふ。正成これをみてすでに相たゝかハんとす。しかれども矢田たゝかふ事あたはずして引しりぞ

敵男女ともに櫓の上のぼり鯨波を揚。味方の兵おほくこれを射けれども、矢一筋も櫓の上にはいたらず。こゝにをひて大権現、正成に命じてこれを射さしめたまふ。時に正成矢三本をはなつ。其矢二筋櫓の中に入。かるがゆへに敵兵皆にげおりぬ。此とき正成がはなつところの矢に内藤四郎左衛門の七字を書す。是によりて敵兵その矢ををくり、且矢文をそへていはく、今しほらくたがひに矢止をすべし、此兵にふたゝび一矢をはなたしめよ、となり。ときに大権現仰ありけるハ、これ敵のはかりことなり、かならず射る事なかれ、とのたまふ。しかれども正成勇氣擡すゝみ出て矢をはなたとするとき、敵兵櫓をもちて道のかたハラに伏かくれ、正成をみてすみやかにすゝみ、すでに突とするととき、正成これを射て櫓を透その敵を殺。かるがゆへに敵味方あひともにこれを褒。大権現もまた感じさせたまふ。元龜元年、織田信長越前の國金崎に發向したまふとき、大権現御加勢のため若州に進發したまふ。此所にをひて正成が進退ハなはだ御こゝろにかなふ。すでに退陣のとき、正成しつはらひととなりて、矢六筋をはなちて若州の

く。正成がいはいはく、汝さきにハ五人の士を匂今すみやかに逃去、なんぞ其言葉のたがふ事かくのごとくなるや。矢田がいはいはく、我汝にむかひなんぞ死を輕せんや、といひをハりて去。こゝにをひて正成もまたしりぞきぬ。のち矢田人にかたりけるハ、我もし正成とあひまじハラバ討死せん事必定たるべし、といふ。諸人却てこれを褒。そのうち一揆の大將石川十郎左衛門ならびに渡邊半藏兩人鎧をもちて大権現の御前にすゝみ來る。石川ハ正成が伯父なり。しかれども敵となるによりて、正成これを射て兩膝を貫。石川引退てつゐに死す。此とき又渡邊源五左衛門を射殺ぬ。大権現大にこれを感じさせたまふ。時に石川伯耆守數正言上しけるハ、正成數度軍忠を勵す事もつとも他にことなり、わすれさせ給ふ事なかれ、といふ。大権現これを、しかり、とのたまふ。

同年、三州牛窪合戦に、牧野等小坂井に出張し、御油と却村の間にをひて味方を圍るとき、正成しつはらひととなりて敵のすゝみきたるを射るに、鞍の前輪より後輪まで射貫。これによりて敵兵すゝみえずしてひきしりぞきぬ。同七年、三州御油にをひて駿州の兵とあひたゝかふとき、

甲兵六人を射殺。大権現大にこれをかんに給ふ。同年、姉川合戦に、正成あるひは鎧をあハせあるひハ敵を射て、大に軍忠をはげます。そのうち敵兵正成が射るところの矢を贈る。

同三年、遠州三方原合戦に、正成敵とあひたゝかふの間、旗下をハなるゝ事すでにとをし。此時味方の先鋒敗せんとす。こゝにをひて正成馬をはせて旗下に謁しければ、大権現御馬をひかへさせたまひ、したがひたてまつるものわづかに七八騎なり。正成諫たてまつり、しつはらひして引しりぞく。此時息男甚一郎正貞敵陣にふかいりして、味方のしりぞくをしらず。かるがゆへに正成その死生をしらため馬をかへし敵陣にいれば、正貞刃をまじへ敵數人と相たゝかふ。正成これを見鎧をもちて敵兵を突しりぞけて、敵の馬をとり正貞を乗てひきしりぞく。正貞此戰場にをひて首級を得、即従もまた高名す。

天正三年、長篠合戦のとき、正成が進退はなハだ御こゝろにかなふ。退陣の刻しつはらひととなり、鎧をもつて敵をつき首級をえたり。同四年、武田勝頼遠州横須加に出陣す。このとき正成

物見のものとなりて彼地にいたる。すでに勝頼引しりぞく刻、味方の兵おほく是とあひたつかはんとす。しかれども正成よく軍機を察し士卒を諷てたつかはざらしむ。大権現これをしかりとし給ふ。

同年、高天神を攻めとき、正成城中に矢をはなちて、おほく敵兵を殺す。此とき敵矢ををくりていはく、一箭を射て兩人をころす、尋常の射手にはあらず、と云々。同八年、遠州色尾合戦のとき、正成弓・鎧をもつて高名を得たり。

同十二年、長久手合戦のとき、正成仰をうけたまはり物見の者となりて彼地にいたり、敵軍の形勢を察してはせかへり、言上していはく、すみやかにこれを撃たまハ、かならず勝利あらん、となり。しかれども味方いまだきたりあつまるものおほからずして、その勢はなハだすくなし。このゆへに諸兵あひたつかはんとせず。こゝにをひて正成すくみたつかはん事をしばく請たてまつれば、大権現しかるべしとおぼしめし、兵をすくめて大に撃て勝利をえ給ふ。その翌日、正成をめされ軍功を感じたまふ。御歸陣の後、三州野羽村にをひて采地七百石を

十一年十二月上旬織田彈正忠信秀が斥候の兵五騎城邊にいたる、城兵これをつたむとす。正成衆に先だち鎧下の高名を得たり〔時に十六歳〕。二十四日の夜尾張の軍勢不意に襲ひ來り、すでに二丸にせめ入、ときに正成弓をとり、百指の土俵鞆をつけ、はしり出てこれを射る。故に敵城中に引しりぞく。正成勝にのりて散々に射る。矢既に盡むとする時かたはらに童あり。正成彼に告て汝いそぎ矢をとり來るべしといふ。童はしり行て矢を抱き來る。これをとりて猶敵を射る。ために死傷するもの二百餘人にして大捷を得ること正成が善射による。二十五日廣忠卿このことをきこしめされ、その軍功を感じたまひめされて御家人に列し、三河國幡豆郡の内にをいて采地をたまひ、伯父彌次右衛門某もまた其功を賞して七所拵の刀をあたふ。この年また織田の兵三河國安城城にありて上野城を襲ひ、部將陣頭にすくみ諸卒を下知してきそひ來る。城中より突て出相戦ふ。正成先がけして彼部將と鎧をあはせ、その首級を得たり。敵兵これがために敗走す。弘治三年三河國刈屋合戦のときも正成鎧をとりて敵を突、首級を得、或は弓をもつて敵若干を射殺す。永

くはへたまふ。同十八年、小田原陣にしたがひ奉。ときに秀吉、織田信雄をもつて大権現に告、正成に對面せんとのたまふ。しかれども正成年老たるゆへこれを辭してつぬにまみえず。

慶長七年四月、領地柏間村にありて病に襲時、かたじけなくも台徳院殿より醫師久志本左京に命じて療治をくへしめ給ふ。しかれども其疾つみに癒ずして、同月十二日に死す。年七十六。法名善宗。

三 『寛政重修諸家譜』卷第八百十一

内藤

● 圖書助忠俊がとき罪ありて家たゆ。

● 正成

甚一郎 四郎左衛門 内藤甚五左衛門某〔紀伊家御附屬家臣譜忠郷〕の二男。母は某氏。

伯父内藤彌次右衛門某に屬し三河國上野城にあり。天文

祿元年東照宮尾張國大高城に兵糧を入させたまふのときしたがひたてまつり、六年三河國一向專修の門徒一揆のとき、其徒五人野寺よりいで針崎にをいて正成を討むとす。正成これを討退くとき賊長矢田作十郎某はせ來り、其敗兵にむかひ、敵は僅に一人、味方は五人なり何ぞこれをつつ事を得ざるやと罵る。正成これを聞て矢田にむかひ戦を接むとす。しかれども矢田これを避て引退く。正成がいはく、汝さきに味方の十五人を罵り、今速に逃去、何ぞ其言のたがふ事かくの如きやと。矢田かへり見て我汝にむかひ何ぞ死を輕むぜんやといひて去。のち矢田人にかたりて我若正成と戦を接へば、かならず彼がために討れなむといふ。其驍勇これをもつてする。七年賊徒大久保黨がこもれる上和田を攻るにより、正月十一日東照宮御出馬ありてこれを助けたまふ。このとき賊徒石川十郎左衛門某及び渡邊源五左衛門高綱その男半藏守綱等御前に近くすくみ來る。正成がいはく、石川は我舅なり、然れども今日事は君の事なれば豈私の好みを顧むやとて、その兩膝を射る。退て死す。又渡邊高綱をも射殺がゆへに賊徒大に敗走す。東照宮これを感じし

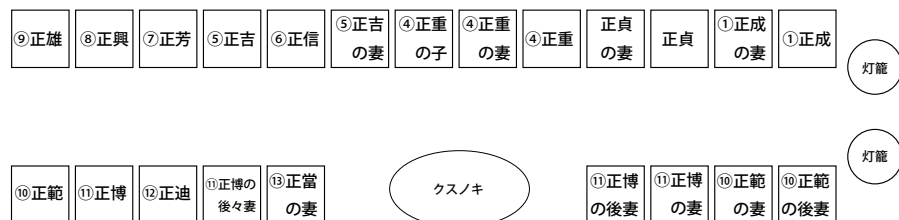
給ふ。石川數正御傍にありて言上せるは、正成しば／＼軍忠をはげますこと他に異なり、わすれさせたまふ事なかれとなり。この年三河國牛窪の合戦に、今川氏眞が臣牧野右馬允成定小坂井に出張し、御油と劫村の間にいて御味方の兵をかこむ。時に正成後殿となりて追來る敵を射る。その矢鞍の前輪より後輪に貫く。敵兵恐怖して退く。この年また御油の城を攻たまふのとき、城の男女ともに櫓に登りて鯨波を揚、味方の兵多くこれを射れども其間遠くして及ばず。時に正成を召て命ぜられしかば、正成やがて三矢をはなちて二矢櫓のうちに入、敵兵恐れて櫓より下る。其矢に姓名を記せしかば、敵その矢を送り、又矢文を添て今しばらくたがひに矢止をすべし。この兵にふた／＼び一矢をはなたしめよと書す。東照宮御覽ありて、これ敵の謀なり必射ることなかれと制したまふ。正成勇敢忍ぶに堪えずしてす／＼み出矢をはなたむとす。ときに敵兵櫓を持って道のかたはらに伏、正成がす／＼むをまちてこれを突むとす。正成矢をはなち櫓をとをしてかの兵を射殺す。兩軍相ともにこれを褒美す。十二年正月二十三日朝比奈備中守泰能がこまれる遠江國掛川の城を

せめたまふのとき、したがひたてまつり首級を得たり。元龜元年織田右府越前に發向し、朝倉が金崎城をせむ。これにより東照宮援兵として御出陣あり。この所にいて正成が進退御旨にかなふ。すでに退陣のとき若狹近江の一揆等道を遮る。正成後殿となりて矢六本をはなち、敵六人を射殺し、御感をかうぶる。六月姉川の役には或は鎗をあはせ、或は弓をとりて戦功多し、三年三方原の合戦に正成奮戦して御麾下を離るゝことすでに遠し。このとき御味方の先鋒敗せむとす。正成馬をはせて御麾下にいたる。御馬にしたがふものわづかに七八騎なり。正成いさめたてまつりて後殿して引退く。ときに男正貞敵陣にありて味方のしりぞくをしらず、正成その死生をしらんがため馬をかへし敵陣に入。正貞が數人と血戦するを見てかたはらより鎗を揮て敵を突のけ、その馬をうばひとり、正貞を棄て引退く。天正三年長篠合戦のときも首級を得たり。四年武田勝頼兵を遠江國に出すのよしきこしめされ、横須賀に御出陣あり。正成斥候となりてかの地にいたる。すでに勝頼引退くのとき御麾下の兵出て戦はむとす。正成よく軍機を察してこれをとす。ま

た高天神の城攻に正成矢をはなちておほく城中の兵を殺す。このとき敵矢をくりていはく、一發にして二人を殪す者尋常の射手にあらずと賞す。八年遠江國色尾合戦のときも弓鎗をとりて高名を得たり。十二年長久手の役に正成高木主水助清秀と／＼もに井伊直政に副て先鋒となり、清秀とおなじく仰をうけたまはりて敵軍の形勢を察し、はせ來りて言上しけるは、敵軍半はやぶれ、半はいまだ戦はず。前後離散す。そのひまをうか／＼ひ、これを討ばかならず利あらむと。爰にをいて俄に御旗をす／＼められ、大に撃て敵陣を敗る。味方凱歌を唱へて首級を實

し覺の人と稱せらる。これそのころ織田右府列國の兵士の姓名を集書し、武功あるものはこれに墨點を加ふ。正成も其列たるにより。この年東照宮關東にうつらせたまふの／＼ち、武藏國埼玉郡にをいて五千石の采地をたまふ。慶長七年四月采地栢間村にありて病に罹るの時、台徳院殿より侍醫久志本左京亮常衡を下されて療治を加へしめたまふ。十二日死す。年七十六。法名善宗。妻は牧野讚岐守康成が女。

く士卒を休めたまふべきなり。このこと御許容ありて軍をかへして小幡城に入せたまふ。御歸陣の後三河國幡豆郡にをいて七百石を加へたまふ。十八年小田原陣のときもしたがひたてまつる。豊臣太閤正成に對面あるべきむねきこえけれども、老年たるをもつてこれを辭し、終にまみえず、正成かつて御家人のうちにをいて點のか／＼り



市指定史跡・旗本内藤家歴代の墓所(宝篋印塔ほか) 配置図

(久喜市菖蒲町下相間 善宗寺)

14 頁・19 頁・20 頁の写真等参照。

歴史資料でよむ久喜市ゆかりの人物ブックレット ③

内藤正成の活躍

発行日 平成30年3月30日
 監修者 吉岡 孝 (よしおか たかし)
 編集 久喜市教育委員会文化財保護課
 発行 久喜市教育委員会
 〒346-0033 久喜市下清久500-1
 印刷 有限会社イノウ印刷
 〒346-0005 久喜市本町2-2-21

- 1944 岡谷繁實『名将言行録 (6)』(岩波文庫)
- 1964 北島正元『江戸幕府の権力構造』(岩波書店)
- 1965 高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬編集『新訂 寛政重修諸家譜』第13(統群書類従完成会)
- 1981 桑田忠親ほか『賤ヶ岳合戦図 小牧長久手合戦図』戦国合戦絵屏風集成第2巻(中央公論社)
- 1985 斎木一馬・林亮勝・橋本政宣校訂『寛永諸家系図伝』第8(統群書類従完成会)
- 1985 堀和久「内藤正成」(『歴史と旅』第12巻第7号所収)
- 1988 桑田忠親ほか『川中島合戦図 長篠合戦図』普及版 戦国合戦絵屏風集成第1巻(中央公論社)
- 1993 埼玉県立文書館『大熊(正)家文書目録』埼玉県立文書館収蔵文書目録第32集
- 1995 奥出賢治「家康と徳川十六将図の謎を追う」(『歴史読本』第40巻第21号所収)
- 1995 須藤茂樹「『戦国集合武将図』の世界」(同上)
- 1995 中村整史朗「内藤正成」(同上)
- 1996 蘆田伊人校訂『新編武蔵風土記稿』第10巻 大日本地誌体系⑩(雄山閣)
- 1999 林亮勝・坂本正仁校訂『干城録』第7(人間舎)
- 2002 平野明夫『三河 松平一族』(新人物往来社)
- 2003 藤本正行『信長の戦争 『信長公記』に見る戦国軍事学』(講談社)
- 2006 菖蒲町教育委員会『菖蒲町の歴史と文化財 通史編』
- 2012 久喜市教育委員会『久喜市指定文化財「旗本内藤家歴代の墓所(宝篋印塔ほか)」・「善宗寺嘉永三年銘宝篋印塔及び宝塔記碑」調査報告書』久喜市文化財調査報告書第1集
- 2016 笠谷和比古『徳川家康一われ一人腹を切て、万民を助くべしー』(ミネルヴァ書房)
- 2016 菊地浩之『徳川家臣団の謎』(KADOKAWA)

裏表紙

「徳川十六神将図」に描かれた「内藤四郎左衛門正成」(個人蔵)

